
お暇書き！！

doubter

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お暇書き！！

【Nコード】

N3436E

【作者名】

doubter

【あらすじ】

ある1人の平凡で適当な青年と、訳ありでその青年に引き取られた少女の少し変わったそれだけでくだくだな日常を描いた話。作者も暇人、読者も暇人、そんなストーリー

これから始まる新生活！（前書き）

はじめまして！doubterです。

本作品は処女作であり、他人に読んでもらおうと思って描いた初めての文章です。

故に自己満足はしていても、他の人が面白いかの自信はありません。その辺りを色々と言ってくださると嬉しいです。

長々すいません。それではどうぞ！

これから始まる新生活！

「今日からここが君の家だよ」

僕はなるべく優しく聞こえるように気をつけつつ、ひきつらないように必死な笑顔で言った。

どうも微笑みというヤツは理解できない。

目の前の女の子は首をちょこんとかしげながら、大きな瞳をこちらに向けて不思議そうな顔をしていた。

なんか仔犬みたいだな、僕は失礼ながらもそう思った。

「じゃあ、あなたが私のパパになるの？」

少し不安そうな、それでいてとてもワクワクしている目でこちらを見ていた。

その顔はやっぱり仔犬みたいで少しおかしかった。

「まあ、そうなるかな。ところでまだ名前を覚えていないんだ。教えてくれるかい？」

少女は少し拗ねたようにムっとしながら、

「優だよ。たった二文字なんだからちゃんと覚えてよー」

怒った顔でも中学生ながら可愛いな、そう思う僕は早くも犯罪者と呼ばれてもしょうがないのかもしれない。

「ああ、ごめんごめん。ん、そろそろご飯時かな。まあお詫びと云つてはあれだけど、今日は優の好きなものを作ってあげるよ」

「歓迎会も兼ねてね、心の中で付け足しておく。」

ホント?と聞く少女の目はとても輝いていた。

「じゃあねー、えーっと北京ダック!」

・・・はいいっ!?

「なんで、北京ダックなんだい?」

今の僕はとても間抜けな顔をしている事だろう。

まあとうぜんだが家にアヒルはいない。

「なんかね、将さんが何でも作ってくれていわれてたらそう言え
って言わ

れたの!とところで北京ダックって何?」

アイツの仕業かー、今度説教もといシメに行こう。

「あとね、プリン作って!!思いつきり甘いの!」

うんうん、やっぱこういうのが普通なんだろう。そして、僕にとっ
ても普通になって行くんだろう。

そんな事を思いつつ、アヒルってどこで

売ってるんだろう?などとしばし悩む僕なのでした。

これから始まる新生活！（後書き）

まず、ここまで読んでくださりありがとうございます！

次回からここで登場人物紹介を予定しています。次回は「僕」こと
神流裕一君予定です。

では、次回もお暇書き！！をよろしくお願いします

それはここから始まった！（前書き）

予想に反して既に読んでくださった人がいました！！
ご指摘など頂けるとなお嬉しいです。

それはここから始まった！

さて、どうして僕がこの少女もとい優の父親をする事になったかを説明しよう。

（2週間前）

「なあ裕一、実はお前に頼みたい事があるんだが」

「うん？どうした、そんなに改まって？」

将の改まった態度に少し驚きつつも僕は尋ねた。

面倒なことなどは、この時点で既に気付くべきだった。まあ、何が
できる訳でもないけどさ。

「俺が公務員として孤児院で働いているのは知ってるだろう？んでな、
少々訳ありでお前に引き取って欲しい子がいるんだよ。頼めないか
？」

「なんで、僕なんだ？別に僕より子供の扱いに慣れた人だつてたく
さんいるだろ？」

「ちよつと変り種でな。お前みたいなヤツにしか頼めないんだよ」
意味がわからねえよ。そう答えつつも別に断る理由も大して無かつ
た。

それに1人での生活も飽きつつあったので、とりあえず顔合わせを
兼ねて将と3人で食事をする事になった。

（食事会にて）

迎えた週末。優の第一印象は可愛いけどたぶん少し変わり者なんだろうなあ、だった。

だってそうだろう？

いきなり会った途端に抱きついてくる、赤髪の女の子を変わってると言わずに何とする！？

まあ正直に言うともあまりにいきなりだったから少し赤くなってしまうっていた。

「名前はなんて言うの？」

少女は無垢な瞳をこちらに向けてやや上目遣いになりながら、尋ねた。

「僕は「ああ、ソイツがお前の父親になる神流裕一だ。よろしく痛え！！！」

当たり前だ。かなり痛むように殴ったんだからな。自己紹介位邪魔するなよ。

大体まだ決まっていだろ。

「まあ名前はその馬鹿の言った通りの神流裕一。ところで、君の名前は？」

悔しいのもう一度自己紹介をする。

「私は音無 優だよ！！よろしくね、裕一！いや、お父さんかな」
太陽のような笑顔とはまさしくこの事だろうというほどの笑顔がそこにはあった。

「いや、まだ決まっていな．．．いや、なんでもない」

あの瞳は反則だ！誰かレッドカード持ってきて！

いかん。また取り乱してしまった。でも、僕が最後まで言ったら泣き出してしまふんではないだろうか？と思わせるような表情を見せられたらとても言えないだろ？
つまり僕は事なかれ主義のへたれなのだ。

「んじゃあ、きまりだな。優もだいぶなついでるし、裕一も反対じゃないようだしな。あ、手続きは俺に任せろ。しっかりバツチリしといてやるよ」

こうして、僕が何も言う事無く優は僕の義娘になった。
まあその分、将には制裁を加えてやった。別に大した不満も無かったのだが。

ちなみに何の制裁かは、僕にも分らない。

それはここから始まった！（後書き）

まず、すみません。

前言を撤回させてください。

キャラ紹介ですが、最初から無理にやらなくても良いんじゃない？
とご指摘をもらったのでしばらく先送りになります。

これからも、お暇書き！！お願いします。

学校へ行こう！（前書き）

どうも！doubterです。この度より多くの人にこの小説を知ってもらうために、この小説を宣伝してくれる方を募集します！！条件は無いですが、事後確認で構わないので宣伝した場所などを教えてください。

小説を読もう内なら宣伝してくださった小説のタイトルを、ブログならアドレスを教えてくださいと嬉しいです。

また、許可が下りれば前書きで宣伝してくださいだった場所、小説ならその感想も前書きにスポンサー様と言う事で書いていきたいと思えます。

どうかよろしくお願いします！！

学校へ行くぞう！

結局僕の半日はアヒル探しのために使われた。しかしまあ、なんであの八百屋はアヒルなんて売っていたんだろ？そして僕はどこで北京ダックの調理法なんて覚えたんだかね。
うーん、謎だ。

世の中不思議だらけだ。

「あ、そうだ。明日学校に行く手続きをしにいくぞ」

「はあ。たくさん食べた！ん？何裕一？」

とりあえず、げんこつを優の頭に落とす。人の話を聞かないヤツが悪い。

「うぐー。なにすんのさ」

その目には少し涙が浮かんでいる。ちよつとやり過ぎたかな。まあ、いいや。

「もう一度言つと、明日学校に行くぞ」

「何しに行くの？キャン！なにするのさー」

今の奇声は僕がもう一発げんこつを落としたからだ。

「アハハハ、何だよ、キャンって。あー、面白い。アハハハ。」
むーつと、優が膨れっ面になる。ああ、その顔も面白い。アハハハ！

「はあ、笑い疲れたあ。んで、一応転校するんだから手続きが必要なんだよ。だから明日一緒に学校に行くぞ」

「はい。やったー学校だー学校！」
はしゃぎ過ぎだ馬鹿、近所迷惑だろ。と一応注意するがそれを見て
いる分には悪い気はしなかった。相変わらず仔犬みたいだけどさ。

ちなみに学校に行くのは10時頃を予定している。僕は明日有休で
休むので今日は久々にゆっくり寝よう。
そんな風に思っている。

そんな僕のささやかな願いは優によって舜殺された。

「何をしてるんだ？」

「何って布団に入ってるんだけど？」

優は、さも当然そうな顔をこちらに向ける。

「いや、見たら分かるようにそこは僕のベッドなんだけど。それ以
前に優にはちゃんと自分の部屋があるでしょうが」

「えー、一緒に寝ようよー」

優はその柔らかかそうな頬を膨らませながら答えた。

風呂上りで艶やかな髪や、少し赤らんだ顔がやけに色っぽい。

一応言っておくと、僕は決してロリコンではない。

「まあ、お前がそうしたいなら、別に良いけど今日だけだぞ」
僕は意外と優に甘い気がする。

「はいー！」

その返事と共に僕はベッドに引きずり込まれた。優は女の子にして

は大きいが、それでも僕よりずっと小さい。何より僕よりもずっと華奢だ。
それなのに僕を片手で引きずり込んだ。すごいな。武術の才能があるかもしれない。

つて、僕は何を考えてるんだ。もうそれは切り捨てたはずだろ。

「くうーん」

ああ、もう優は寝たのか。それにしても何だよ、くうーんって。いや、笑ってはだめだ！
優を起こしてしまう！

やっと落ち着いたよ。相変わらずレベル高いな。

さてと、僕も寝ますか。

でもその前に、なぜか蹴られてるんだよね。どうにかしないと、寝られないかなあ。

1時間後

「……寝れない」

僕は未だに蹴られていた。

2時間後

足を押さえたのに、今度は頭突きが飛んできて寝られない。

3時間後

ついに部区はあきらめてリビングのソファに避難した。
布団忘れたから冷えるなあ。

4時間後

やっと、うとうとしてきた。
オヤスミー。

翌日

うん、完全に寝不足だよ。

あの後優が寝ぼけたままソファに移動してきて僕にのしかかって、
まて寝てしまった。

おかげで僕は、優を落とさないように気をつけなければならなかった。
あの状態でまともに寝られるはずもない。

やっぱりもう1度寝よう。

おやすみー

学校へ行こう！（後書き）

さて、第3話いかがでしたか？

まだ慣れないせいで1話の更新ではててしまい、中々キャラの紹介に移れない状態です。

質問等あれば、キャラを引き連れてお答えしようと思つので、前書きともどもよろしくお願ひします。

ではまた次回！！

お暇書き！！でした。

番外編！その1（前書き）

前回の紹介の件、よろしくお願ひします。

番外編！その1

皆さんこんばんは！！doubterです。

こんな始まったばかりのお話の番外編を出します。ええ、番外編では僕も出ましたまに僕目線でも書いていこうと思います。

と言う事で、第1回は神流裕一君の紹介です。

では、裕一君どうぞー。拍手ーパチパチ

「僕の紹介はあとがきじゃなかったの？」

・・・だってあとがきだとそこまではばてちゃうんだもん。

「そりゃ自分のせいじゃん。まあいいや。えーはじめまして！神流裕一です。」

だって、しょうがないやん。でも、これから頑張っていきます。

因みに僕と裕一君の関係は先輩後輩に近い友達です！言わば僕の兄貴分です。

「んで、僕は何を言えばいいんだい？」

そうだなー、じゃあ僕の質問に答えていってくださいな。

まず第1問！！現在の職業は？

「んー、訳あって詳しくは言えないけど出版業界でのマネージャー？に近い仕事をメインにやってるよ。でも昔は教師をやってたから教育免状も持ってるよ。」

じゃあ、なんで辞めたの？

「まあ、いろいろとね。」

詳しく聞いてはいけない気もするので次行こう！

てな訳で第2問！！自分の身体的特徴と趣味を述べよ。

「質問じゃなくて命令になってるよね。うん、身長は並程度だし顔も並だからなあ。やっぱ髪かな。髪の色が少し青みがかった黒だからね。趣味はねえ．．．しいて言えば食べ歩きかな。おいしい裏店なんかに行くとしピを聞いてやってみたりもするかな。」

（顔も結構整っててかつこ良いんだけどな。）

あー、裕一君の料理が美味しいのはそれだったんだ。ところでその髪は染めてるの？

「いや。元からなんだ。小さい頃はよくそれでいじめられてさ。武術をやるようになったのもそれがきっかけなんだよね。」

あれ？裕一君、武道なんかやってたっけ？

「武道とはちよつと違うけど一応少しはやってるよ。護身術と言うより殺人術の方がしつくり来る位激しいけどね。」

凄いな。ひよろひよろだから、力無さそうだけどなあ。

では、次行きます！！

第4問！将さんとの関係は？

「ああ、アイツとは中学からの友達でね。当時まだいじめられていた僕にとっては数少ない親友だったんだよ。それで今でもたまに飲みに行ったりする仲なんだよね。」

へえ。って、結構話題が重くない！？

「まあ、今でも色々あるからね。それよりそろそろ帰っていいかな？優を待たせてるんだ。」

あ、分かりました。今日はいろいろとありがとうございました！！
「うん、じゃあねー。そうだ、今度優も連れて3人でラーメンでも食べに行こうよ！良い店みつけたからさ。」

良いねー！是非行こう！

では、今回はこれにて。ありがとうございました！！

番外編！その1（後書き）

どうもI doubterです!!

今回の形式が案外気に入ったのでこの方法でいきたいと思えます。
今のところ感想もあまりありませんが、アクセス数は少しずつ増えているので全く意味の分からないモノではないと考えております。
んな訳無えだろ!!と思っっている方は是非1声お掛けください。
次回もお暇書き!!お願いします。

学校へ行こう2！（前書き）

読者数もだいぶ増えていきます！！

感謝で胸がいっぱいです！

そんな訳で頑張って連続更新です。

最後にお知らせを追加しました。

学校へ行こう2！

「裕一、起きてよー」

うーん、まだ眠いなあ。って！

「優！今何時！？」

まずい、学校に行くんだった！

「もう9時50分だよー。学校間に合わないよー」

ただっ子口調の優。むくって口をすばめてる様子は中学生にすら見えぬ。

まあ、そんな事言ってる場合じゃないね。

3秒でスーツ姿に着替え、（何故そんな事ができるかは、秘密だ！）僕はダッシュで家を飛び出した。

学校は走れば10分で着く場所にある。間に合うはずだ！

まあ、問題は優の体力だろう。

前の学校では孤児院に居たこともあって、部活はしていなかったらしい。

だから決してはや

って、速っ！！

。僕よりずいぶん前にいるよ！足の速さには結構自信あったのに・・・

結局、僕はほぼ予定通りの時間に着いた。少し落ち込み気味だが、

まあ優には気づかれまい。

そして僕達は今、応接室で待機している。
なんでも、担任の教師が遅刻しているらしい。しよっちゅう寝坊で遅刻するので心配はいらないそうだ。
でもそれで良いのだろうか？

10分後

優も一応緊張しているんだろう。そわそわしているが黙り込んでいる。にしても遅いな。

ガラガラッ！

「いや、すみません。遅れましたー」

あー、やっと来たよ。

「あつ！！」「」

目の前に出て来たおそらく優の担任であろうソイツと不覚にも声が重なった。

うっ、何たる失敗。

「神流、なんでお前がこんな所に居るんだよ。んで、隣の奴は何者だよ。あれか、誘拐ってヤツか？しかも学校に逃げ込むたあ、どんな馬鹿だよ！」

相変わらず語調が荒いな。よし。じゃあ僕も手加減しない。

「はあ？これのどこが誘拐だよ。逃げようと思えばいつでもって状態じゃないか。それとも単にお前の目が節穴なのか？」

隣では優がオロオロしている。まあいきなり自分の身内がこれから

担任になるかもしれない人と毒づき始めたら当然だろう。

「んで、今日は何しに来たんだ？まさか呑み仲間を呼びに来たんじやないだろ？」

さて、まあ説明しますか。

「ああ、実はな「分かった！お前が転校生の親だな！」
まあ、そうだよ。」

青筋をひくつかせながら、かろうじて答えた。
いくら相手が帝でも一応は女性だ。一応。

「じゃあ、隣にいるのはお前の娘であり転校生なんだな？てかお前いつの間に結婚なんぞしたんだ？」
相変わらず五月蠅いな。まだ説明してないのに。

「お前の知ってる通り僕は結婚なんぞしてない。良く考えたら分かるよ。まず、僕はいくつだ？」

「私と同じだから26だろ」
こいつが私って言うのはつくづく似合わないな。まあ今はそれ所ではない。

「そつだ。んで、この子の年は？」

「知らねえよ。初対面で分かる訳ないだろ」

「バーカ。学年で予想できるでしょ」

「あ、そうか。んじゃあ14歳位か。でもなんでそんな話をするんだよ?」

「これに答えれば分かるよ。じゃあこの子が生まれた時の僕の年は?」

「...12歳位だな。ってああそついう事か!」
ようやく気付いたよ。

「でもじゃあこの子...優ちゃんだっけ?とお前の関係性は?」
一応義理の娘だな。引き取ったんだから。

「ほう。こんないかにも純粹そうな子を引き取ってどうするつもりだ?この犯罪者め」
とりあえず僕は帝の弱点を知っている。

今こそ、発動の時!
くらえ!くすぐり!!

学校へ行こう2！（後書き）

新キャラ登場です！！

詳しい紹介はまた番外編を作る予定です。
では次回もお暇書き！！よろしくどうぞ。

学校にて！（前書き）

少し雰囲気をかえて挑戦してみました。

なんか、らしくなくなってますw

最後のお知らせはくどいですが、よろしく願いします。

学校にて！

「アハハハ！悪い、悪かった！だからやめてくれ！アハハハ！」
概ね満足したのでやめておく。やり過ぎは後が怖い。ちなみに変態とか言っではいけないよ？まあ帝なんだから。

さて、今の状況を見てみよう。

僕 概ね満足して笑みを浮かべている。

優 状況が把握出来ずオロオロしている。

帝 笑い疲れてぐったりしている。教師なんだから早く手続きをし
ろよ。

うん、中々に異様な光景だ。

そしてかなりぐだぐだになってきた。

「なあ、そろそろ手続きしようぜ」

いい加減しびれをきらし始めた僕から提案する。

本当にこいつが教師なんだから世の中は不思議だ。

「そうだな。んじゃあお前、名前は？」

優を指差しながら尋ねる帝。人を指差すなよ。

「優です！よろしくお願いします！」

「神流優つと。んじゃ次にこの書類に名前を書いてくれ」

「先生、わたし音無優だよ？」

ああ、そうだ。まだ優には戸籍の話はしてなかったんだ。

「優、実は僕が優の父親になったから優の名字は神流になったんだ

よ

ほんの少し優の表情が悲しみや寂しさに翳った。それが僕の心に暗い影を落とす。

「へえ〜。そうなんだー」

無理に明るくしているのがはつきり感じられる。

また僕が人を悲しませている。

「良いじゃないか、神流。裕一と同じ名字だぞ」

帝が助け舟を出す。今回は本当に助かった。後で一杯おごるのも悪くないな。

「ん??じゃあ先生は裕一と同じ名字が良いの?」

さっきの、瞳から見えていた影がやや弱くなる。

本当に今回は帝に感謝しなきゃいけない。だが何故そこで顔を赤くしてうつむくんだ!

そりゃ確かに神流なんて珍しいし、僕と一緒にじゃ恥ずかしいのかもしれないがそんなに真っ赤にならなくても良いんじゃないか?

「あの、えつと、ええ!?!」

もう帝は暴走してるね。放って置こうか。

「そっかー。先生がそんなに喜ぶんだね。じゃあ裕一と同じ名字って良いのかも」

なせあれが喜んでるように見える。

そしてじゃあってなんだ、じゃあって。

「あれ?裕一、結局私は何て名字なの?」

今話してたじゃん!? 神流だよ。

「分かったー。じゃあわたしは神流優になるんだよね？」
その瞳はどこか遠くを見つめていて、その表情はどこか悲しげな笑みだった。
僕はまた何もできなかった。

1時間後

「さて、じゃあ手続きも終わったし今日はもう終わりだ。帰っていいぞ。優には宿題な。自己紹介考えとけ。面白いやつを頼むぞ。以上！」

それだけ言うと帝は出ていった。直後先ほどの先生の怒鳴り声があった。遅刻するからだよ。

帰り道

「ねえ裕一、わたしって迷惑かな？」
そう尋ねる優の顔にははつきりと不安の色がみてとれた。

「そんな事無いよ。僕にとっては何年振りかの一緒に暮らせる家族だからね。」
そう。だからそんな顔するなよ。声にならない僕の思い。いつか届くだろうか。

「良かったー！これからもよろしくね、裕一！」
優の目には光輝く何か、顔には満面の笑みをたたえていた。

学校にて！（後書き）

秀囲気の描写の練習を兼ねて書いたら、やや重い話になりました。個人的にはこういうのもありかな？と思っています。

実はこの間初めてメッセージをいただきました。許可を取っていないので名前は出せませんが、1通だけなので送った方は自分だとわかりだと思いません。

そこで、すみませんがURLを送って頂けないでしょうか？僕の能力では、見つけられなかったので宜しく願います。

2度も同じものをすいません。ですが、メッセージをもらったのがとても嬉しくまた貴重なためご協力お願いします。

・・・感想、メッセージ待ってます！！

番外編！その2（前書き）

実は、この間夢だったコロコロ先生の感想欄に作者として行きました！

返事まで返して頂いて感激です！

と言う訳で、番外の番外的な話を作るかもしれません。
毎度前置きが長いですね、ではどうぞ！

番外編！その2

どうもー!! doubterです!!

今回は第2回と言う事で帝先生の紹介をしたいと、思います。

「なあ、順番間違えてないか？普通優の番だろ。」

まあ優ちゃんは今度裕一君と3人でラーメン食へに行くからその時でいいかな、と思って。

「なら良いか。」

じゃあ、早速始めようか。

「分かった。私は帝 紅だ。年は裕一と同じだ。 . . . 後は何を話せば良いのだ？」

じゃあ、裕一君との関係は？

「中学からのダチでな。当時アイツは嫉妬といじめの対象だったんだよ。何でも完璧にこなすし、性格は今以上にひねれてたから。まともに友人と言えたのはおそらく私と将、あと数人だけだったな。」
「前回は聞いたけど、相変わらず大変だったんだね。」

「だがアイツが1番そういうのを気にしなかったんだよ。少なくとも表面上は一切出さなかったよ。それどころか他人まで助けていたな。」

へえ。昔から凄い人だったんだね！。

ところで、帝先生は裕一君のことが好きって本当？

「ふえっ！えっ、何故それを？いやいやいや、ち、違うぞノノノノ」

真っ赤になってそんなにかみながら言われても説得力無いですよ。

ニヤニヤ

「ううー。教師を馬鹿にするなー。」
ありゃ、ちよつとやりすぎたかな？まあでも、もうちよつと遊ばれてもらおう。」

あ！裕一君だ！！おーい。

「ふえっ！？ち、違うのだぞ裕一。こ、これはだな。／／／／／」
冗談だよw そんなに真っ赤になっちゃって。ニヤニヤ

「貴様ー！！」

「おい、呼んだか？」

「！？」

なんで裕一君がいるの！？

「いや、今日は帝と飲む約束をしていたからだけど？あ、良かったらdoubterも来るか？」

いや、僕は未成年だから飲めないよー。

「その辺は何とかんるよ。んじゃあ、行くか。ほら帝も行くぞー。」

く道中にてく

「貴様、後で覚えておけよ。」

ヤベツ。やっぱ遊びすぎた。

番外編！その2（後書き）

いてて、あの後帝先生に思いつ切りやられましたdoubterです。

今回のでは、全く容姿について触れていなかったのでもここで少し。背丈は少し低めで、優ちゃんの方が若干高いですね。髪は真っ黒のショートカット（やや作者の趣味が入りました）で、体型はいわゆるボンツキュツボンツってやつですね。

ちなみに、髪については唯一本人も気にしていたかなり気に入っています。

まあ、こんな感じですね。

質問などあればいつでもどうぞ！
次回もお暇書き！！お願いします。

ある日の夕食！（前書き）

遂に、この小説を宣伝して下さる方が現れました！！

十叶 ひかる先生です。URLは以下の通りです！<http://ncode.syosetu.com/n8464d/>

このまつたり感は個人的には大好きです。

では、本編もどうぞ

ある日の夕食！

あー、眠いなあ。

あのぐだぐだな手続きから1週間がたった。優は性格の明るさや容姿（？）もあつて既にクラスに馴染んだようだし、僕の仕事も、まあ問題ない。

要は全て順調だ。

「ただいま。優、ご飯にするよー」

はあーい、元気な声と共に階段を降りる音がする。

「あのさ、なんでそんな格好してるの？」

僕の質問も当然だろう。なにせ今の優の格好は犬耳の付け耳に、尻尾まで付けている。しかしまあ、なんとというか・・・似合う。前に仔犬みたいだと思ったけど、まんまそんな感じだ。

「これねー、友達の秋ちゃんが貸してくれたの！。きっと裕一も気に入るよって言ってたよ？どうかな？」

上目使いのまま首をかしげて聞いてくる。

「・・・良く似合ってるよ！」

僕は少しロリコンに近づきつつあるのかもしれないなあ。それ以前に一応とは言え、娘を相手にこんなにあたふたしていて良いのだろうか？

自分が優の立場だったら・・・キモいと思うね。

・・・うわあ、スゲー落ち込む。

実際、優は真っ赤になっている。そりゃ僕みたいのが父親だったら確かに恥ずかしいかもね。

今日はもうアレだ。一人で呑み明かしてやる。

「じ、じゃあご飯にしようか」

しばしの沈黙の後、僕がこの雰囲気になれなくなった。だってねえ……。無理だよ。

「うん？あれ？わたしどうしたんだろう？まさか寝てた!？」

突然スイッチが入ったかの如く大声を上げた優。てか、寝てたのかよ!？僕の苦労は何なんだよ!？そして声大きいわ!！五月蠅いよ!！

すいません。少し暴走してました。でもさ、だってさ、ぶつぶつぶつ……。

「ところでさ、その秋ちゃんってのはどんな子なの？」

正直に言えば、結構気になる。なんでこんな物持ってるんだろう？

「うん、なんかね少し変わった子だよ!そう言えば今度家に来たって言ってたけどいい?」

「うん、別に構わないよ」

そう言いつつも大嵐の予感がする。そしてそれはおそらく当たるだろうなあ。

優が友達連れて来るんだからしつかりしなきゃいけないな。頑張りますか。

そんなある日の夕食時の出来事でした。

ある日の夕食！（後書き）

以前、番外の番外を作るという話をしましたが、完成しました！！
ただ、この小説はあまりにも番外が多く（これからも増えていきます）これ以上やるとどれが本編か分からなくなりそうなためさつき
思いつい・・・ゲフンゲフン。失礼。

考えた末に「応募者全員サービス」と言う形を採りたいと思います
！！

ここの作者の方は、感想欄に「欲しい」と書き込んでください。それ以外の方は、メッセージのほうにアドレスと共にその旨をお伝え
ください！

但し、どちらも嫌だという方もいるかもしれないのでそう言うメッセージ、感想が4通以上来たら普通に載せたいと思います。

長いあとがきすいませんでした。

裕一の家！（前書き）

遂に師匠の名前を出せる日がやってきました！！

その師匠こと闇桜先生は今、同サイトにただひたすらに自由を求めてを連載中です！

URLはこちら<http://ncode.syosetu.com/n9805c/>

この小説とは違い緊張感のある作品です！是非お読みください。

こちらにも負けずに頑張ります。では、どうぞ！

裕一の家！

ただいまー。

あのイヌミミ騒動が過ぎて最初の週末。んで、前から延ばし延ばしになっていった将を家に呼ぶのを決行させられてます。まだ結構ゴタゴタしてるんだけどなあ。

僕の家もずいぶん変わったんだよな。両親を失い、家族と離れ離れになってからただ寝る場所だった家が今確かに人の気配のある場所になっている。優が来て荷物が増えた。そしてそれをしまっ家具が増えた。そんな風にして……。しかし、この幸せをこの感動を感じる前に1つ言わせてくれ！

「なんで家中がピンクになってるんだああ！！！」
いや、もう壁も家具も全部ピンクなんですよ？しかも真っ赤のように表現するなら真っピンク、真紅のように表現するなら真ピンク。とにかくもの凄く鮮やかだ。

「あ、裕一。お帰りー。ねえどう？？家中中？」
やたらに元気な優。顔や服にピンクのペンキが付いている。てか、ペンキなのかよ！？……落ちないだろうなあ。

「どつって言ってもねえ。ん？その子誰？」
気がつくくと優の隣には見知らぬ女の子がいた。

「友達の秋ちゃんだよ！この間呼んでいって言ってたから、裕一にも会いたがってたし連れて来たの！」

へえ、この子が。見た目は優より小さい。なんとというかほんわかした子だな。

「はじめましてー。秋ですー」

「あのね、秋ちゃんも一緒に家をピンクにしたんだよ！」
とりあえずげんこつだな。

「キャンー!!」「痛いですー」
当然だ。

「おーい、裕一。入るぞー」

外から将の声。いや、マズイ!!

「ちよつと待て!つて手遅れか」

「ギャハハハ!お前の家、リフォームでもしたのかよ?でもピンク
つてどういう趣味だよ!!ギャハハハ!」

はあ。先1ヶ月は笑われるんだろうな。

「「あ!!!」」

僕が陰で落ち込んでるにもかかわらず、大声を出す秋ちゃんと
将。少しボリユームを下げる。

「あ、将君お久しぶりー。ところで秋ちゃんと知り合いなの?」

「まあな。「近所の馬鹿ヤローです(だ)」」

なんか仲悪そうだな。でもだったらなんで息ぴったりなんだよ。
そして将よ、秋ちゃんはヤローではないぞ。

なんとというか共ににらみ合いっぱくになっている。が、将はやた
らに背が高いし秋ちゃんはそこらの小学生よりも低いので完全に上
目使いになってしまう。それは相当な可愛らしさがあった。

「ねーねー、そろそろお昼ご飯にしない？わたしお腹減っちゃったよ」

空気を全く気にしないお嬢様がいらっしやいましたよ。そんな事すると二人を敵に回すぞ。

「「「そうですね（だな）」」」

「息ぴったりじゃん！」

結局その直後に（僕が）昼食を作った。まあ評判も良かったから良しとしよう。その後は当然部屋を元に戻す作業をした。「なんで俺まで…」って将が言ってた気がするけど気にしたら負けだと思っっている。

裕一の家！（後書き）

将 「なんか俺の扱い適当じゃね!？」

裕一 「気のせいだろ」

秋 「ですねー」

優 「秋ちゃん毒舌家なんだよね!」

裕一 「それ、嬉しそうに言う事じゃないでしょ」

秋 「ではまた次回、お暇書き!!をよろしくですー」

三人（（秋ちゃんがおいしい所取りしてった!!）（）（）

と言う訳で、次回もよろしくお願いします!

譲れないモノ（前書き）

テスト寸前なので短いのは勘弁してください、すみません

譲れないモノ

家の色を元に戻した後、（僕が）おやつを作ってそのほか騒いだ後の片付けも（僕が）した。…なんだか3倍くらい疲れた気がする。

「んじゃあ、俺そろそろ帰るわ」

時間は夕方。ぎゃあぎゃあ騒いで一段落した直後、将が呟いた。とても残念そうな言い方は演技かはたまた本心か。

「将君じゃあねー。また来てねー」

「おう！また来るさ」

ドアが閉まると将は見えなくなった。まあアイツにしては早いが子供が帰る時間には十分な時間帯だ。
さて

「秋ちゃんは どうする？」

そう、まだ秋ちゃんは帰っていない。追い出す気はないが、そろそろ帰るべきなんじゃないかなと個人的には思っている。

「……帰りたく…ないです」

うつむいてこちらには顔も向けない秋ちゃん。声はふざけて言ったとは思えない真面目なもの。うん、どうしようか。

「ねえねえ、じゃあ今日家に泊まっていけば？ねえ裕一、いいですよ？」

僕は構わないんだがそういう問題でもないでしょ。

「え〜、いいじゃん」

「まあ家に泊まるのはともかく、なんで家に帰りたくないの？家族

だって心配してるでしょ」

「…家族なんて」

苦々しげに言う秋ちゃん。あー、これはもう僕の一番譲れない部分だから

「ふざけんなー!」

「!?!」

思いつきり怒鳴った。もちろん子供相手にキレた訳ではない。まあ怒りが無い訳ではないが。でも、その言葉の意味をこの子より分かってるつもりだから

「これから少し昔話をしようか」

「裕一、空気読めてる?」

うるさい。それにお前だけには言われたくない

「ひどーい」

そう言っつて優は頬を膨らませる。やっぱりお前空気読めてないだろ。

「まあ昔話と言っつても俺の身の上話だからそんなに前の事じゃないけどね」

優の目が大きく見開かれる。今の言葉で気付いたみたいだな。普段と一人称が変わって《俺》になっつてる事に。

さて、あまり気持ちの良い話ではないけどご静聴していただきましようか。

譲れないモノ（後書き）

次回より、裕一君の過去を書く予定です。上手く書けるか自信はありませんが、よろしくお願いします！！

以上、doubterでした！

今回は、ものすごい番外です！師匠こと闇桜先生の「ただひたすらに自由を求めて」とコラボしました！そちらも読んで頂くと面白さ倍増間違い無いです！ちなみにURLはこちら

<http://ncode.syosetu.com/n9805c/>

普段の5倍とやたらに長いですがどうぞ

『さあやって参りました！ 遂に実現したお茶会！ いやー無駄にテンション高いです！』

「doubterお前、ちよい騒がしくない？」

『だって楽しみだったんだもん』

「わーい、オヤツだお茶会だ大騒ぎだー」

『優ちゃんも元気だねー。ナイス！！』

「はあ。僕は今回この2人の管理をしなきゃいけないのか」

『まあ、気にせずに。さて皆さん声を揃えて』

「『お邪魔しま〜す』」

『こら！ つまみ食いをするな！！ ……あ、いらっしゃい。3人とも』

「お菓子 お菓子」

「お久しぶりですね〜」

「……既にこつちも異常にテンション高いじゃん」

「わーい、美味しそー。ねえねえ食べていい?」

『優ちゃん、流石にあいさつが先だよ。ども、お呼びいただきありがとございますー』

『この空間では時間を気にしなくてもすむからね。夢のようなものだと思っただ方がいいよ』

「……この空間にいい思い出がないんですけど」

「あたしも……かなあ?」

『あー、ねえ今は山田さん出てこないよね?』

「うん?誰だ、それ?」

「良い匂いだなー」

『優ちゃん、一人完全に空気無視しないでよ!』

『彼は出てこないよ』

「優ちゃん、どっちがたくさん食べれるか競争しよう!」

「マイヤちゃんになんて負けないんだからね!」

「ここに来れるのは私たちだけみたいですね。カイさんとハルさんは気付いてすらいらないようです。……マイヤさん、優さん。いくら無くならないからって、おなかを壊さない程度にしてくださいよ」

「おーい、そんなに急いで食べたなら「ゴホツゴホツ」ほら見る。レイナちゃんさ、マイヤちゃんも普段からあんな感じなのかい？」

「はい。私たちは旅の途中で使う食材の半分は彼女の胃の中に入っていきますよ」

「そりゃ恐ろしいな。と言うか、食費とか大変じゃない？」

「カイさんが稼いだお金の大半が食費に消えて……。普通なら移動は馬車みたいなものもあるんですけど、借りるお金がないんです」

「案外ギリギリの経済状況なんだな」

『いや、良かったよ。本当に』

『呼べなくはないけど……呼ぶ？ ってマイヤ！ 水！』

「ごほっ！ ごふうっ！！……うん。クッキーを頬張りすぎたね。気をつけなきゃ」

『全力で遠慮します！ っておーい、優ちゃん大丈夫？ 涙目になってるよ？』

「はあ、クッキーが喉に張り付いて死ぬかと思ったー」

『どんな死に方だよ』

『そーいえばさ、優ちゃんとレイナの身長はさして変わらないような気が……』

「見た感じの年齢も対して変わらないよね」

「ほっといてください……」

「あ、本当だー！えへへ。ねえねえ、こっして肩組むと姉妹みたいじゃない？」

『……ま、まあ、レイナさんは若く見えるって事じゃないかな？』

「種族の差ですよ。どーせ小さいですよ」

『あーあ。レイナがいじけちゃったよ。まあ、放つとこっつ』

『放っておいていいの!?!』

「まあまあ、レイナちゃん。クッキーあげるから元気出してよ」

『優ちゃん、それ元からマイヤさん達のだからね』

『うん。そのうち立ち直るから。ちなみに、材料費は気にしないでいいよ』

「お金の話に戻るけど、最近はおたしたちも稼いでるから余裕が出てきたんだけどねえ」

「へえ〜。でもまた食費に消えるんだろ（笑）まあ、ウチも似たようなものだけど」

「レイナは……もう立ち直ったみたいだね」

「まあ、確かにそののでもいいも食費に消えちゃうんですけどね…。やはり、それは共通なんですわね」

「二人ともなんかわたし達を馬鹿にしてない？」

「気のせいだろ。と言うか、レイナちゃん案外タフだな」

『立ち直りはやつ!!』

『それは気のせいだよ』

「そつえばさ、2人とも刀とか持ったことある？」

「ふつうはないと思いますよ……。見たこともないんじゃないですか？ たしか、銃刀法違反とかいうルールがありましたよね」

『いや、違つと思つ』

「僕は一応。近代兵器から刀まで一通りね」

「わたしも包丁なら使った事あるよー！」

『それ、微妙に違つから』

「そちらは普段の武器以外に何か使えるの？」

『こつちにはいろんな武器があるよ。そつちのミサイルとかはないけど、その分魔法があるから』

「へえ、裕一は刀持ったことあるんだ。……稽古付けて上げようか

「？」

「うん、一応は扱えるんだけど暫く使ってないからな」

「あ、それいいですね。護身術は身につけていた方がいいですよ。優さんには魔法を教えましょうか？」

「魔法！？すごい！わたしも使えるの？」

『ここで補足だけど、調理道具は基本的に変わらないよ。少し形が違ったりするけど』

『裕一君の方はともかく、優ちゃんはやめとくよ。暴走されても困るし』

「え、やだやだ。絶対やる。やりたいよー、マイヤちゃん教えてくれない？」

「あたしが教えられるのは気術だけだからなあ……。レイナに教えてもらって？」

「裕一さんはマイヤさんに聞けば効率的な動き方を教えてもらえるはずですから」

『うちのマイヤもね。まさか、魔物の肉を使うとは思わなかったよ』

「つつさいなあ。じゃ、向こう行こっか、裕一。刀だけじゃなくて裕一が得意な獲物の使い方を教えて上げるよ！……その代わり、料理教えて？」

「優さんも行きましようか。教える代わりに、そちらの世界のこと、いっぱい話してくださいね」

『あゝあ。行っちゃったよ。知らないぞ〜』

『別にいいけど。…きっと裕一君とレイナさんはボロボロになって戻って来ると思うよ?』

『まあ、二人とも何とかなるでしょ?』

『じゃあ今日はこれにてお開きかな?みんな行っちゃったし』

『どうせなら待ってみようよ。案外楽しい結果に終わるかもよ?』

『…だと良いけどね』

一時間後……

『あ、帰ってきた。……予想道理だね』

「はあはあはあ。し、死ぬ」

「裕一。あなたは投擲に向いてたね。こんなに早く10本同時に投げられるようになるとは思わなかったよ」

「つ、疲れました……。まさか、あそこまでできるとは思いませんでしたよ」

「いえーい！なんかまだまだいけそうだよ！あれ裕一、どうしたの？」

『ん。どうやら双方とも並以上の才能があつたみたいだね』

「あれはそれどころじゃないですよ！」

『なんかももの凄い鍛えてもらったみたいだね』

「はあはあ、すまん。料理を教えるのはまたの機会でいいか？体が動かなくて」

「むう。裕一に無視された」

『裕一とレイナ、二人ともずいぶん疲れてる&傷だらけみたいだね』

「私は障壁があつたからなんとか避けられましたけど……」

「あ、そうだ。優ちゃん。耳貸して……」「ゴニョゴニョ……」

「マイヤちゃんって本当に人間かよ……」

「カイ兄から教わってればね……」

『すごい言い様だな。かなり参ってるみたいだねえ。うん？優ちゃん何やってるの？』

『おや？おもしろそうなことをやるんだね』

「聞いてたの!?!」

『うん。でも、まあいいでしょ』

「わーい。……雷の神ゼウスよ、彼の者に裁きの雷を。キルライト
ニングー!!」

ズガンー!!!!!!

「って、何やってるんですかあ!?!」

「doubterと、ついでにさっき無視した裕一に雷の最上級魔法使ったの」

『あっはっは。爽快だねえ』

「見てて飽きないよねえ」

「あの二人は無事なんでしょうか?」

「『さあ?』『さあ?』」

「さあ? って……」

『……………ゴホツゴホツ。あの僕は一応この中じゃ唯一の一般人なんですけど』

「いや、やっぱり変な事優に教えさすものじゃないな」

『なんで無事なのさ!?!』

「いや、さっき力尽きて落としたナイフが避雷針になってね。でも近かったから多少痺れた」

『てか、なんで僕は狙われたんだ!?!』

「裕一、それ、判断不足。あの雷は魔力で作られたもの。避雷針の意味はないよ。今回はそのナイフがdoubterの近くに転がってたのと、標的が本来doubterだっただけ。やり直し。こっち来い」

『まあ、そういうこと。裕一はまたマイヤに引きずられてっちゃったね。ちなみに、doubterが死ななかつた理由はこの空間がそういう設定になってるからだよ』

「いや、僕は魔法なんて知らねえよおお!!」

「あー、すつきりした!裕一まだ頑張るんだね。いってらっしゃい!」

「逆に言えばやりたい放題ですか?」

『うん』

『…鬼だな、ホントに』(後で裕一君とどこかで愚痴ろっかな)

「愚痴は適度に吐き出さないとストレスで胃潰瘍になりますからね。その方が得策ですよ」

『最近、人を鍛えることにはまってるらしいよ』

『いや、それ明らかに鍛える事が目的じゃないでしょ』

「うーん、なんか疲れちゃった」

『優ちゃんが疲れたのはまだ魔法を使うのになれてないからだと思
うよ』

「それは置いといて。doubterさん。そちらはどうなんですか？」

『置いといてって……。まあ、いいか』

『うーん、本当は裕一君に話してもらおうと思ったんだけど今回は優ちゃんでもいいかな』

「《で》ってひどーい。みゆー、あ！そういえばこの間の授業参観でね、先生と裕一が口喧嘩し始めて1時間潰れたんだよ！」

『ほう？ 口喧嘩で1時間。それは授業中かい？』

「そう！突然ってほどじゃないけど授業中にね！もうクラスみんなでビックリだよ」

「！」

『よかったね。授業がつぶれて』

「よくないですよ！？ ……と、言いたいところですが今回は賛成

ですね。よかったじゃないですか」

「でも少し恥ずかしかったかなー。あ、裕一！お帰りー」

『さつきよりも随分お疲れだね』

「……もう……無理……」

「ありや。倒れちゃった」

『あはは。倒れちゃったよ。レイナ』

「わかってますよ。……ヒーリング、クーラ！」

『疲労と傷は回復したし、すぐに目を覚ますよ。放つといて先に進もう』

「確かに恥ずかしいですよね……。ああ、そうでした。マイヤさんにはまだ話してなかったですよね」

「もう闇桜から聞いたよ。優ちゃん、そういうときはしっかりお仕置きしないと……ね？」

『あの一、マイヤさん眼が怖いんですけど！？』

「それいいね！うふふー、どれにしようかなー」

「う、うーん。やっぱり倒れちゃったか。ん？なんでみんな僕を見てるの？」

『気にしちゃいけないよ　裕一くん』

「まあ、それなら許せますね」

「じゃ、次にいく？　これは本人がいないときにやるのが一番楽しいからね」

「…いや、なんかもう勘弁してください」

『ずいぶんぐつたりだね』

「ねえねえ2人共。どうしたらいいと思う？」

「やっぱりお菓子食べ対決！」

『……それはやめなさい』

「ケーキならいいんですけどねえ…」

『そつち！？』

「うん、じゃあ今度はケーキで勝負だ！！」

「それなら体力使わないし、僕は結構甘党だからそれでもいいよ。あ、閻桜とdoubterも強制ね」

『チーズケーキなら受けて立ちますよ』

「あたしはシヨコラ！」

「じゃあ……モンブランで」

「どれにしようかな　じゃあわたしはやっぱりショートケーキで！」

「僕はそうだな…このタルトかな」

『みんなやる気だね。でも、全員参加となると書き手がなくなるから今回はここまで　では皆さん、せーの』

「「「「「いただきます！」「」「」「」」

因みに、暫く後に全員が腹痛に悶えていたのは言うまでもありません。とせ

いかがでしたでしょうか？次回、少々暗めの話を入れますが本当のお暇書き！！はもつとのんびりとしたものを目指していきます。そう、こんな風に。

では、胃腸薬飲んできますw

以上、doubterでした

むかしの話（前書き）

短編を1話つくりました。よければそちらも読んでみてください。
では、ごじぞ

むかしの話

「今から10年位前かな。僕が中3だった時だから」

~~~~~

裕一少年はその日、家族と出掛けていた。その帰り。と言っても、近所の地区会の帰りで歩いて帰るほどの距離。そんな所を両親と3人で。因みに、本当は妹がいるのだが遠くの私学に入学したために今はいない。

「あー、疲れた」

裕一少年はやや内容が退屈なものだった為、どっと疲れたようで不満そうに親に言った。

「そうね。じゃあ、早く帰ってご飯にしましょ」

「うむ、では早く行くぞぞ」

穏やかな口調の母親に、やや古風な父親。しかしその父親が半袖短パンというのはいかがなものか。因みに母親は薄地の着物である。

この瞬間が裕一少年にとって最も全てがそろった日常だった。そう、この瞬間までは

パンツ！！

そんな感じの大きな音がした気がした。否、確かにした

そして裕一少年の体中に激痛が走る。身体から引き剥がされるような痛み。否、確かに身体から引き剥がされていた。そう確信したのは裕一自身の身体が目の前で転がっていたから。車道の真ん中で暑い日差しを受けているそれは到底自分の身体とは思えなかった。次に見えたのは同じく横たわる両親の姿だった。

裕一はどの瞬間かは分からないが気を失った。

次に裕一が目覚めたのは見覚えのない場所だった。すぐに病院と分かった。全身がまるで熱を発しているように熱い。でも痛みは不気味なほどしなかった。たぶん左腕に刺さっている点滴のおかげだろう。

「あんな事故にあつたのにな」

言ってから気付いた。自分が事故にあつたのを知ってる事に、それがあの幽体離脱の決定的な証拠である事に。

「あ！目が覚めましたか？」

女性看護師そういふなり走つてどこかに行つてしまった。しばらくして、医者らしき人が来てあちこちを診ていた。

「もう大丈夫でしょう。……ちょっと来てもらえますか？」

そう言つてその医者は裕一を連れて病室を出た。相変わらず体中が熱くて歩くのも一苦労だった。

着いたのは病院でも明らかに異質な場所だった。なんとというか分からないが鳥肌が立った。

「…さあ、どうぞ」

この医者は正直過ぎた。明らかに悪い事がこの部屋の中にある。

「失礼します」

裕一少年も意を決して中に入る。

中には2つのベッドがあつてそれぞれに人が眠っていた、白い布を顔に載せて。若い青年医が2人の布をそつと外す。見えたのは

両親の姿。

その瞬間、裕一には違う光景がフラッシュバックした。

幽体離脱の直後、裕一は両親を視ていた。普通の状態じゃないから、二人の中から何かが抜けていくのが視えた。あれが抜けきったら死んでしまうのは五感ではない感覚が教えていた。そして自分が無力だとも告げている。

わずかに父親が動く。そこから大量の何かが漏れていく。相当苦しいはずなのにそれでも動き続け、幽体であるはずの裕一の方を向いた。

「裕一、Be... ambitious」

そこで父は事切れた。

「なんでやねん!!」

裕一少年は自身意味も無く使っていた関西弁で思わずツッコミをした。最期の言葉に変な事を言った父に怒りさえ一瞬感じた。だがそんな事はどうでもよかった。その時に父親の遺体に触れてしまったのだ。

冷たかった。

途端に裕一は自分が震えているのを感じた。まるで、その冷たさが流れ込んできたように。ただ、体はまだとても熱かった。熱いのに震えていた。

怖かった。

そう、裕一は怖かった。これからの事が。妹がいない今、二人の死は家族を失うのと同じだった。

裕一は泣いた。悲しみよりも恐怖心から。心のどこかの冷静な誰かが自分を卑下していた。両親の為に泣いていない自分を。

日は暮れようとしていた。

## むかしの話（後書き）

もう1話つなげる予定です。暗いんですが、明るいだけの人って本当にはいないと思うんですね。暗い経験は人を明るく、強くするとというのが僕の考えです。なので、もう少しお付き合いください。

次回も、お暇書き!! よろしくお願ひします

## むかしから今へ

「今まで生きてきてたぶんあの時が一番泣いたんだらうね」

二人の少女は何も言わない。困惑しているようだった。自分の感情、それがどういったモノなのかよく分からないんだと思う。

「でも、この話はもう少し続くん」

~~~~~

裕一少年はそれからほぼ半日泣き続けた。青年医師が看護師を呼ばなければもつとその場に居続けたらう。ベッドに強制送還される頃には肉体的にも精神的にもボロボロだったらしく翌日にひどい高熱だった。ただ頭だけは妙に冴えていた。

おかげで、熱が下がる時には何をすべきかは大体イメージできた。

遺体の状態等も考えて、翌日に通夜が行われた。来たのは数人の親族だけで裕一は形の上では喪主だったが呆然としていた。泣いている伯父に言われた

「お前のせいだ」

という言葉だけが鮮明に残った。

次に、形見分けという名の遺産争いがあった。裕一にとってこれだけは死守しなければならなかった。せめて、妹の学費や帰る場所だけは守ってやりたい。結局、遺産の全ては兄妹のモノで落ち着いた。揉めに揉めたが、叔父が

「人として恥ずかしくないのか!」

と怒鳴ったのが決定打になった。そして叔父の家に引き取られる事も決まった。

叔父の一家はあたたかく裕一を迎えてくれた。特に裕一よりも2歳年上の紗弥加は弟を欲しがっていたのでとても可愛がってくれた。しかし、

「姉貴になるのってなんか憧れるのよね」

という発言からも分かるようにやや変わり者で、可愛がられ方も変わっていた。そんな風に4人めの家族として裕一も受け入れられたが彼自身の負い目や引け目、元々の家族に1人入っていくのは容易ではなくなんとなく家の中でも漂っていた。

その内裕一は学校でも浮く存在になった。元々あまり人付き合いは良くなかったし、学校外での出来事を友達に当たってしまったから、まともに友達と呼べたのは帝と将だけになった。どんどん裕一は荒んでいった。

ある日の学校帰り、裕一はここ最近家に帰りたくなかった為に公園でただ座って時間を潰している。何をするわけでもない、ただベンチに座って時間を潰していた。

「何やってんだ？こんな場所です？」

突然、女の人に声をかけられた。裕一には声をかけられるような理由がわからなかった。そもそも見知らぬ人だった。

「……別に、ただ時間潰してるだけッス」

普通なら完全に無視する所だがもうこの人に会う事もないし、なにより暇だったので返事をした。この時の裕一の学校での様子を考えれば返事をしただけでもかなり珍しい事だった。

「お前、流の葬式からずいぶんと暗くなっただな」

見知らぬその人は独り言のように呟く。

「俺の父さんを知ってるんですか？」

裕一は目を見開いた。父の葬式は急だったので親戚か、かなり親しい人しかいなかったはず。

「まあな。それよりお前、ウチに来ないか？」

「遊びにですか？」

「そうじゃなくて。うん、つまり養子？」

「なんで疑問文なんですか…。それ以前になんでです？」

裕一が見たところ、この人はまだ30いかないくらいの若さだろう。この人だって恋愛や他の個人的な事があるはずだ。そんな事の邪魔を裕一はしたくなかった。

「流との約束でな。万が一お前の親が死んで、お前がかなり参ったら私が引き取るつう約束なんだ」

「俺、聞いてないツスよ！？いつ、そんな約束を？」

「確か……去年、流が星座占いで最下位だった時だな。占いがもの凄く不吉だったらしかたただけど、あんなに真顔で頼まれてしかも理由が星座占いなんだから大爆笑したね」

「父さん何やってんの！？」

「まあアイツがアホなのは元からだろ。んでどうする？」

「いや、これ以上他の人に迷惑かけたくないのでもやめておきます」
葬式で伯父に

「お前のせいだ」と言われてから裕一の行動の基準は他人に、特に叔父の一家に迷惑をかけない事だった。その為なら我を殺してさえいた。

「迷惑ならこんな提案しないっての。むしろ家事の負担減るんだし」

最後の方はあまりに小声なので聞こえなかった。

「……でも俺は」

わずかに下を向く。公園の砂が風によって飛んでいる。

「あー、もう決めた！もうお前、ウチに來い！決定だぞ！んで、もうお前一人称に俺って使うな。それは今から私のモノだ！」

~~~~~

「そう言っつて、その日の内に僕は師匠の養子になったんだよね」

僕の顔は今、苦笑しているだろう。でも、師匠には本当に感謝している。苦しかった時期を終わらせたのはあの人だ。まあその師匠の家でひどい目にあつたのは確かだけども。

「秋ちゃん一人くらいウチにても問題ないよ。だけども、もう少し家族といてみてもいいんじゃないかな？それでもダメならウチに來ればいい」

秋ちゃんは小さくだけど確かに頷いてくれた。思っていたよりずっと聡い子だ。

「…やっぱり、今日は帰ります」

小さくそれでも決意の籠った声だった。

「分かった。じゃあ、またね」

もう今僕の言つべきことはない。ただ見送るのみだ。

「あの一！」

「うん？何？」

突然呼び止められ振り向いた。

「裕一お兄さんって呼んでいいですか？」

正直なところ、これには面をくらった。

「別に良いけど、きつとすぐに使わなくなるよ」

なにせ、優が既に呼び捨てだからな。別に良いけどな。

ありがとうございます！そう言って秋ちゃんは帰っていった。

「ねえ裕一？」

「何？」

夕食を食べていると優が突然話しかけてきた。

「わたしってここにいても良いのかな？」

そう言う優はやっぱり寂しそうな顔をしていた。

「当たり前だろ。ここはお前の家でもあるんだから」

「えへへ。そうだね。これからもよろしく、裕一お兄さん！」

ガタツ！

「やめてくれ。なんか調子狂うから」

それから夕食中、僕は優に弄ばれた。それでも優の目の奥は揺れ続けていた。

因みに、その夜僕は師匠が出てくる《悪夢》を見た。翌朝は優曰く、

ひどい顔だったらしい。

むかしから今へ（後書き）

遅くなりました、すいません。

2話をつなげて、しかも暗めの話というのは無謀過ぎました。なんとか書きましたが、あまり良くないですね（苦笑）

この話については本当にどうしようもなく、僕自身改善策が分からないのでもし良ければ感想等でアドバイスをください。

次回からのんびりしていくつもりです！

では、doubterでした！

あれは食べれない！ b y 優（前書き）

あれは食べれない！ by 優

「裕一、大変だよ！ 大変だよ！！ 変態だよ！！！ あれ、なんか違う！？」

優が突然騒ぎだした。てか落ち着け、少し、いやかなり五月蠅い。因みになんてこんな昼間から優がいるかというところと今日が既に夏休みだからだ。まあ今日は土曜日だから関係ないけどさ。

「僕は変態じゃないよ？ ところで、どうした？」

「なんかね、青っぱいカビの生えたモノが冷蔵庫の中にあつたの！ しかもくさいんだよー」

カビの生えたモノ？ ああ、この前もらったブルーチーズだな。

「美味しいんだが、今は昼食べてないからその後で食べるか？」

「裕一、もしかして暑さでおかしくなっちゃった？ カビの生えたモノは食べちゃいけないんだよ？」

うわあ、スゲー腹立つなあ。てか、本人が一番ばてるよね。横になって扇風機の前でアーーってやるのはいいけどさ、Tシャツで自分を仰ぐのはやめなさいって。段々あられもない格好になるから。

「……優の昼、抜きな」

「ごめんなさい！ それだけはやめて！」

優の悲痛な叫びが聞こえる中、僕はソファを立ってキッチンに向かった。やゝめゝてゝって騒いでる優は放置だ。可愛いから昼食は作ってあげるけどね。

（昼食後）

「さて、じゃあアレ食べてみようか」

そう言つて僕は冷蔵庫からブルーチーズを取り出した。優の目は明らかに汚物を見る目そのものだ。

「……裕一、本当に食べるの？」

ドン引きしてるよ。まあ見てくれはかなり不気味だからなー。

「食べたら分かるって。いただきますーす」

モグモグ。いや、この独特な味が良いんだよね。昼間から贅沢だよ。

「あれ？ 食べないの？ じゃあ、もう一切れいただきますーす」

モグモグ。うん、やっぱり美味しいな。

「……じゃ、じゃあ、わたしも食べようかな。……いただきます」

いつになく真剣な優。いや、ブルーチーズは親の仇を見るような目で見えるモノじゃないよ？

「モグモグモグモグモグモグ」

ブルーチーズの味わいについてあえて言葉だけで語るとするなら、そうだなー、口の中で独特な臭みが爆発したみたいになるって感じかな。まあ、やっぱり食べてみるのが一番だよ。モグモグ。

「モグモグ……ゴホッ！」

あ、優がむせた。んでそのまま倒れて……ってヤバイじゃん！？

「お、おい、大丈夫か？」

ガバツ！ よかった。立ち上がった。そして急に走り出して、どこに行くんだろう？

「み、みひゅー（み、水）」

水って言ってもそっちはトイレだけど、いいのかな？ あゝ、戻って来た戻って来た。てか、自分の家で迷子になるって。優、バカだなー。

お、そんな事言ってる間に戻って来た。

「ゆうひひ、にやにほれ！？（裕一、何これ！？）」

話し方が歯の無い人みたいだよ。聞き取りづらいし。

「だから、ブルーチーズだって」

「ひょくひえひよほれ（毒でしょこれ！！）」

目の端に涙が見える。ちょっとやり過ぎたかなー。いや、僕は何もしてないけど。

「うゝ、くひゃい（うゝ臭い）」

未だに悶えてる優を見てるのはなかなか面白い。芸人みたいですね。

「ごめんごめん。まだ優には早かったか。ほれ、好きなオレンジジュース」

それすらも疑いの眼差しで見る優。僕の信用は完全になくなったようだ。

「はゝ。まだ口の中で変な匂いがする。裕一！！これは食べ物じ

やないよー!..」

相当ご立腹ですよ。うーん、どうしようかな。

結局、優は明日のオヤツをドーナツにするという約束で機嫌を直した。いや、むしろ踊り出しそうだったね、あれは。そんなに好きなら今度作ってあげよう。火傷するから大変なんだけどさ。

因みに、その翌日は秋ちゃんも来て2人でブルーチーズを食べて悶えてた。秋ちゃんにも凄い恨めしい目で見られたんですよ!？  
勧めたの僕じゃないのに。

そんなこんなで夏休みが始まったのだった。

あれは食べれない！ b y 優（後書き）

いやあ、ブルーチーズって臭いですよね。僕も最初優みたいになりましたよ。あの後慣れましたけどねw  
久々にのほほんできました！書いてて楽しかったですよ  
では、また次回！！

**THE 肝だめし!! (前書き)**

遅くなりました! もし、もし楽しみに読んでいる方がいらしたら  
すいません。理由は執筆していた携帯が壊れ、修理に出していたた  
めです。

でも、その分普段より長いので勘弁してください!

## THE 肝だめし!!

「おう、皆の衆肝だめしやるぞ!! 肝だめし!!」

先日、まあ家でみんなで飲んでいた時に酔った帝が突然に立ち上がって言い出した。

「「「おー!!」」」

てか、なんで秋ちゃんがいたんだっけ? そしてみんな乗り気なんだ

「おうおう、皆の衆、ちゃんと集まったな。じゃあ、第…何回だっけ? 肝だめし大会を開始する!」

「いや、こんな企画初めてだから」

時刻は午前2時。場所は近所の寺の墓の前。仮眠くらいはしてくるつもりだったんだけど優が隣でテンション上がってて眠れなかった。まあ、そんな事よりも…

「なあ、色々と突っ込んでいいか?」

「おう、かかってこい!」

「まず、将はどうした? アイツいたよな? んで、お盆目前に何やらかす気だ? てか、お前仮にも教師だよな? 児童の深夜徘徊って補導の対象なんだぞ、オイ」

「裕一お兄さん、早口ですなー」

「だな。それに長いから全部黙殺！！」

「……帝、後で墓の真ん中に来い。閻魔様にご対面させてやる」

久々にこんなに殺気出たなー。流石に帝も少し引いてるしさ。

「まあ、今回はお前の引率って事で責任は全部お前が取れな」

うーん、帝や将相手だと口調がきつくなるんだよね。我ながら悪い癖だと思う。

「よし、じゃあ改めてやるぞー」

「「おー！」」

テンション高過ぎだぞ女性陣。時間考えなさいって。

「あ、でもただやってもつまんねえから将のヤツにお化け役用意させといた」

「誰がそんな役引き受けてくれたんだよ？」

「いや、将の職場から徵発してきた」

職員のみなさん、すいません。

「……一応聞こうか。アイツの職場ってどこだ？」

ちよつと小声になりながら話す。まあ、聞かれたら面白くないからさ。実は結構楽しみなんだし。

「お前、知ってるだろ。公営の孤児院だよ。んで、今日来るのはそのガキ共だ」

「おい、ちょっと待て。なんでこんな時間に連れて来させた？」

いや、将のヤツ止めないのかよ!？」

「いや、優に会いたがったらしくてさ。アイツは一応お姉さんみたいな立場で結構なつかれてたらしいからな」

家族としてはとても誇らしい。だけど、それじゃあ文句も言うに言えない。

「分かった。だけど今回だけにしとけよ？」

素直に認めるのは悔しいので最後まで抵抗してみる。我ながら意地っ張りだ。

ルールは2人1組になってこの墓を一周してくる事らしい。因みに一周は約1km、歩いて15分位の距離だ。不正行為は住職が監視カメラで見ているのでバレるらしい。いや、止めるよ住職。むしろ乗り気ってどういう事だ。

「よし、じゃあチーム分けを発表するぞー。私と裕一、秋と優だ」

「いや、おかしいだろ」

すかさず頭を叩く。普通は大人と子供だろう。という事で、グーパーでチームを決めた。チームは秋ちゃんと僕、優と帝だ。にしても、なんで帝は不満そうなんだろう？

「うふふー、それはですねー、帝先生がゆう「わーわーわー!!」」

帝が近くに街灯もなくそれぞれが持っているペンライトの光だけでも分かるくらい真っ赤になりながら今までで一番騒がしい大

声をあげた。あの、周りは普通の住宅地ですよ？

「帝、騒がしいのはまずいって」

「す、すまん。それより秋、何を言おうとした!？」

今度はすっかり小声で秋ちゃんにつめよる。そういえば帝がゆうつてどつという意味だろう？

「言っていいんですかー？」

こちらも明らかにニヤニヤしながら聞き返す。

「……いや、やっぱ言うな」

おお！ 自分の担任を弄んでるよ、この娘。うっん、未恐ろしいな。

と、ここで突然秋ちゃんが腕に抱き着いてくる。しかもさつきよりもニヤニヤしてる。また何か企んでいるんだろうか？

「それじゃー行きましょー！」

そう言っ腕を抱き抱えられたまま引つ張られるように僕達は墓地に入った。墓地は塀に囲まれているので、さつきいた場所よりもさらに暗い。こうして腕を抱き抱えられているか、手を繋いでいないとつっかりすると離れてしまいうさだ。でもまあ、さつき抱き着かれています腕により力が加わったのはそういう理由だけではないと思う。そういう所が秋ちゃん、可愛いからなー。いや、本当の妹みたいって意味だよ?…誰に言い訳してるんだろう。

「キャッ!!!」

「うわっ!!!」

何かひんやりしたものが首筋に！ 寿命縮んだよきつと。今のは…こんにゃくかもしれない。将のヤツやるじゃないか。やる気

出てきたぞー。秋ちゃんはほとんどすがるように僕の腕を抱いている。

「大丈夫？」

「は、ふあい」

震えた声で涙目になりながら言われると余計に心配になる。

「リタイアする？」

「それは嫌です……」

秋ちゃんは意外に頑固なんだな。チクショー、ものすごく可愛いじゃないか。

「じゃあ、行こう」

その後も色々出てきた。ゾンビに扮した将はかなり不気味だったけど、白い布をかぶって一生懸命怖がらせようとしてくれた子ども達は微笑ましいものだった。時間が遅かったのだろう寝てしまった子を起こしてあげた時に、逆にお化けだと思われた時は秋ちゃんもクスクス笑っていた。肝だめしとは言えないかもしれないけれど、これはこれで良いと思う。

そして今。目の前にはミイラがいる。体格的に子どもものそれではないので将だと思うんだけど微妙に違う気もする。大人は他にいないから気のせいだろうけど。正直に言おう、怖い。この上なく怖い。その怖さは今までのお化け役の比じゃない。なんと言うか迫力だけでその気になれば人を気絶させられそうな化け物だ。しかもそれは今にも襲いかかってきそう。秋ちゃんが震えているのが捕まれている腕から分かる。

「確かに怖いけど、ここは火葬だからミイラなんていないはずなん

「だけど……」

無意識に、独り言よりわずかに大きな声で呟いた。自分を励ますためだと思う。

「……あ……」

ミイラはその事に今気付いたようだ。そしてそのまま走り去っていった。器用に墓石をかわして飛ぶように。ミイラの動きじゃないっしょ。

その直撃、ようやく僕達はゴールした。まだ後ろからは悲鳴やら雄叫びに近い声が聞こえている。僕にはそれを気にする余裕は無かった。秋ちゃんは疲労と怯えが顔にでていてほぼ泣き顔になっていて、その背中をさすり頭を撫でていた。

「最後のは怖かったですー」

僕の方に体を預けて声をやや裏返しながら呟く秋ちゃんは本当に小さく、この娘もまだ幼い子どもなんだと再認識させられた。

「……ようお二人さん。良い雰囲気の所悪いが私らもゴールだ」

「裕一、秋ちゃんに変な事してないよね？」

二人して向けてくる疑いの眼差しが「この変態」と言っている気がした。

「い、いや、ミイラに当てられてな」

しどろもどろになりながら必死に答えた。しかし、そっと離れていく秋ちゃんの顔が一瞬ニヤリと笑ったように見えた。まさか謀られた！？

「は？ ミイラなんていなかったらうが。嘘は良くないぜ、裕一」  
帝の言葉に優も頷く。あれ？ じゃああれは一体……？ 今度

将に聞くとしよう。

「ところで優、その肩にある眼球みたいなヤツは何？」

そう言っつて優の後ろにあるそれを指差す。目玉というにはリアルだが色はデザインされたようになってる。瞳の色は赤……いや、さらに深い深紅。本来白目の部分は、黒になってた。漆黒に近い。目蓋は赤色。つまり外側から赤、黒、赤となっている。

「いやだなー、肩に何かいるわけないじゃ……」「キヤー!?!?!?」「

全員の視点が優の肩に集まって全員驚いてそのまま気絶した。眼球はその直後すうーっと消えていった。ヤバい、今は怖い。そう感じて全員を肩に乗せて全力で家に帰った。

全員をリビングで横にしてからふと時計を見る。

午前2時00分

みんなで集まった時と全く同じ時刻。電波時計なので狂っているわけではない。

「ハハ、アハハハハ」

それからしばらくの間僕の笑う声が家に響いた。ああ、僕も気絶しとけばよかった。

THE 肝だめし!! (後書き)

裕一「なあゾンビもミイラも寺にはいないと思うんだが……」

将「ああ、後で気付いた。ところで、ミイラって何の話だ？」

裕一「いや、僕たちの時に最後に出てきた奴だよ」

将「いや、誰もミイラなんぞやってないぞ？」

裕一「……………」

将・裕一「……お祓いにも行くのか」「」

doubter「今回の話はそう言った意味で危ないよ？ 眼球も

知人の実体験から来てるし」

将「……お前も来るか？」

doubter「是非お願いします」

と言う訳で、行ってきます。次回もお暇書き!!お願いします。

番外編！ その3（前書き）

はい、どうも。doubterです！ 今回、ようやく以前裕一君と約束していたラーメンを食べに行く約束を実行します！

### 番外編！ その3

「なんでこの暑い時をわざわざ選んだの？」  
優ちゃんの言う通りだよ。今日は完全な快晴で、気温もこのきつとこの夏休み最高だよ？

「優もdoubterも分かってないな。暑い中でもものすごく熱いラーメンを食べるのは結構良いものだよ」  
「なんか自信ありげだけど、そういう裕一君も凄い汗だよ？」

「え、そうなんだ！！ 分かった！」  
いや、分かったのかよ！？ しかも裕一君、優ちゃんから目逸らしたよね？

「ねえねえ、それよりもう一つ聞いてもいい？」  
優ちゃん、流石のエアブレイカーっぷり。それで何？

「誰？」

「『あ』」

裕一君と完璧なシンクロ！ それはさて置き、そういえばまだお互い挨拶とか自己紹介してないや。僕の方は一応コネとかで知ってるけどね。

「まあそれはラーメン食べてからでも良いですよ。お互い自己紹介してなかったか。doubterは、僕の都合で今日にしたけど部活とかは？ 一応は高校生なんだし」  
「何故か一応を強調してない！？ まあ…部活は休みらしいよ。間違っって行っちゃったけど…」

「裕一、この人はまだよく分からないけどアホだったのは分かった  
ー」  
いや、ひどいって！

「…ごめん、フォローできない。あ、着いた着いた」  
ガラガラッ。

はい、まいどー！  
裕一君に逃げられた気がする。うーん、でも良い匂いだよ。

「おやつさん、どうも」  
どうも裕一君の馴染みの店みたいね。

「お、ヒロカズじゃねえか。またいつものかい？」  
あれ？ ヒロカズって誰？

「うん、今日はアレ3人前で。お代はこの間手伝ったのにツケとい  
て。それよりおやつさん、僕は裕一だから。あれはヒロカズじゃな  
いよ」

「う、うるせえ！ 通じるからいいだろうが」  
そんな無駄口を叩きながらもラーメンは出来上がり！ 速ッ！！  
そして、でかい！！ 普通の3人前はあるよ？  
あ、これ3人分か。

「何言ってるんだよ。これは1人前だつて」  
裕一君がそう言うなりあの製作者の頭がおかしいと思えない器  
があと2つ出てきた。アノ、コレタベルンデスヨネ？

「おーい、大丈夫かー、まだ名も知らぬ人やーい」

いや、優ちゃんは平気なの!?

「まあ、頑張ろー!」

「あ、結局自己紹介してないじゃん。まあラーメン伸びるから後でね。いただきます」

そうしましょうか。では僕も。いただきます

「いただきますー!」

かくしてラーメンとの激闘が始まった。

（30分後）

「ごちそう様でした!」

「ふう、ごちそう様」

いや、2人共凄いよ。アレを完食しちゃったよ。

「裕一は…doubterだっけ? の分まで食べちゃったからね  
ー」

僕だって半分以上食べてたよ?それだって1・5人前だもん。うう、  
グスン

「ま、僕はラーメン食べたからどっちでもいいや  
いや、そうじゃないよね!?

「あ、そうだった。よし優もdoubterも自己紹介ね」  
……なんか違うよ

「気ニシナぐえ！」

それ以上は言わせないさ。でも裕一君ごめん。食後の相手には強く殴った

「じゃあ優から自己紹介してくれ（doubter後で覚えてるよ）

」

小声で不吉な事言わないでー！

「はい。わたしは神流 優、15歳！ 身長はえ〜っと160の……後半くらいで体重は45くらいだったと思う！ 詳しくは忘れちゃった。特技は走る事と跳ねる事だよ。後はね、髪が紅いってのが特徴だね！」

いや、体重までわりとはつきり言っちゃったよ。オープンで良いけど、ちょっとずれてない？

「別にいいよ。隠す事でもないでしょ」

それは女性陣にはあてはまらないのでは？

「ま、いいつしよ。それより次はdoubterだよ？」

そうだね。えっと、僕はdoubter。身長は優ちゃんより……わずかに低い。それから、って聞いている？

「じゃあ、D吉で！」

はい！？ 何が！？

「だってdoubterって長いじゃない？ だからね、D吉って呼ぶね！」

えっと、その… 裕一君、ヘルプ！

「アハハハ！ いいなD吉ってアハハハ。じゃあ僕もそう呼ぶさ」  
そんな腹を抱えて笑わなくても…。ああ、誰か助けて。

「お前、D吉ってんだな。よし、またウチに来いよ。チャーシュー  
くらいならサービスしてやるよ」  
ラーメン屋の店員にまで覚えられた！？

「俺は店員じゃねえ。店長だ！」  
そこだわる所！？

「裕一、そろそろ時間じゃない？」

「あ、そうだな。じゃあそろそろ解散で  
分かった。でも何の時間？」

「裕一の好きなドラマの再放送だよ！」  
録画しとけよ！！

「あ……べ、別にいいだろ。録画しないのが僕のこだわりなの！」  
じゃあいいけどさ。（無理矢理だなー）

「今度は家に来いよ、D吉」  
もうそれ止めない？

「ダメー。もう君はD吉なのだ！」  
それはひどいって！

結局、そのまま帰って行っちゃったよ…。そういえば、僕はまだち  
ゃんと自己紹介してないや。

番外編！ その3（後書き）

緊急企画です！！ 僕のこの小説内の名前を募集します！  
D吉より素晴らしいもの、又は真つ当なものは採用します！  
僕に分かる方法ならどのように応募方法でも構いません（できれば感想をお願いします）

次回もお楽しみに！

以上doubterでした。D吉じゃないですからね！？

裕一の仕事場！（前書き）

まだぎりぎり夏休み……ですよ？

## 裕一の仕事場！

僕は優よりも一足先に休暇を終え、また出勤です。仕事は基本的にはさほど辛いものではない、というかむしろ楽な方だと思う。まあ基本的にはだけど。

それで僕は今、私服出勤で仕事場の前にいる。後で着替えるのでここまでは私服で来い、って雇い主が。さてと、じゃあ行きま  
すか。

「おはようございます、裕一さん」

「あ、おはようございます綾乃さん」

綾乃さんはここでは数少ない同僚だ。と言うより唯一の同僚か。

「ところで、なんでまたそんな格好してるんですか？」

現在の綾乃さんの格好は着物、それも振袖に近い派手なもの。いや、綾乃さんは元が美人なので似合ってはいるんだけどね。まあ、個人的には着物にはシヨートカットよりも長い髪が合うなと思うけど。

「ほーちゃんの思いつきで。あの、変ですか？」

「いや、むしろとても似合ってますよ」

「そう…ですか？ 良かった」

今のわずかなやりとりで綾乃さんの顔は上目遣いの不安そうな顔（個人的には曇り顔と読んでいる）から、にぱーという形容がぴったりな笑顔（晴れ顔）に変わった。

「そうそう、さっきほーちゃんが裕一さんが来たらすぐに来るように言っていました」

ふう。結局言われずともすぐに行くって。

「分かりました。では」

「はい」

綾乃さんと別れ一度更衣室へ向かう。そしてスーツに着替えるのが僕の仕事のスタートだ。

コンコン

「おはよフベッ！」

部屋に入っけていきなり枕を投げられましたよ。

「遅いではないか！待ちくたびれわ」

ほーちゃんこと佐原歩水は怒ってるっぽい。因みに僕の仕事はこの子のボディガードだったりする。この仕事に就いた時、最初はどれだけ師匠を恨んだことか…

「じゃあ、着替えくらいはしといてよ」

そう、彼女は今まだパジャマのまままで椅子に座っている。つまり、枕は投げるために用意していたのだろう。いや、オイ。

「眠いんでまた寝るんじゃ。なんなら一緒に寝るか？」

これが師匠を恨んだ原因だ。この子とはかく常識がない。

しかも、容姿が素晴らしいの形容ができるほどだから質が悪い。最初は驚き過ぎて何も言えなかった。

「寝ないっての。当たり前だろ」

「なんじゃ、つまらんの」

少し拗ねたように言われても…ね。

僕の雇い主にして彼女の佐原大門さんはいわゆる成り上がりで恨みや妬みに晒される事も多い。本人はそれを覚悟して生きてきてるし、これからもそのつもりらしいが娘が危険な目に会うのは我慢できずこのような半軟禁状態にした。つまり、バカ親のせいでこの子は世間知らずになった訳だ。

「裕一や、またいつもの紅茶を入れてくれ。その間にウチは着替えてくるので」

もう一つ、この仕事を恨んだ原因は彼女の人使いの粗さもある。

最近は慣れたし、何故か少し改善された。

適当な返事をしつつ、僕はもはや日課となった紅茶を入れる作業に取り掛かった。美味いと言ってくれるので悪い気がしないんだよな。

「紅茶はできたかの」

ああ、この感覚は慣れる事はないだろうな。あろう事か彼女はものすごく薄い純白の浴衣のような下着と言われても通りそうなものを着てきやがった。体型も完璧なので17歳とは思えないほど艶かしい。途中、言葉が乱れた事は勘弁して欲しい。慣れない感覚とは恐ろしいものなのだ。

「なあ、いくつか聞いていい？」

「なんじゃ、急に？まあ、構わんかの」

「なんでそんな格好してるんだ？」

「暑いからの」

暑いからってほぼ下着じゃないか。

「別に裕一しかおらんし問題ないじゃろ」

その僕が若干以上に困ってるんだけど

「なぜじゃ？」

「はあ。ところで、男の友達っているの？」

「話が飛び過ぎじゃろ」

いいから、答えてって

「うゝむ、おらんな。裕一と父上以外の男とは関わりもない」

はあ、やっぱりか。となると、これから少し説教だな。あのバカ親のせいだ。

「あのな、とりあえず男と女が2人きりってのはそれだけでそういう関係を疑われるの。んで「そう言う関係とはなんじゃ？」」

ゴッソ！

「痛い！何をするのじゃ！」

人の話を遮る奴に容赦はしないんだよ

「分かった！そして悪かった！じゃからその手を下ろしてくれ！」

ま、これ位で良いかな。躰は大事だよな、うん。

「じゃあ、続けるね。それでそんな薄い服じゃ余計に勘違いされる訳だ。と言うか僕以外の男がここにいたらとつくに襲われてるよ」

「無視も良くないと思うんじゃないの。まあ良い」  
いや、あの、ぶつぶつ言われても聞こえないんですが…

「ああ、そのためのボディガードじゃろ？ それより何故裕一以外なのじゃ？」

「僕には自制心が人並み外れてあるから」  
もちろん、はったりだ。そんな物、さしてあるとも思えないくらい

「裕一になら構わんがの」  
なっ！？ 顔が不覚にも赤くなった…と思う。このバカは真顔で言うから無駄に心臓に悪い。

「そういう事を言うなって言ってるだろ！！ 大体、お前は…」

「のう、ウチからも少し頼みたい事があるんじゃないが」

「何？」

後で気付いたが、話を遮られていたのに気付いていなかった。  
動転し過ぎたね。

「ちゃんと名前で、歩水と呼んでくれないか？ お前呼ばわりはもうたくさんじゃ」

「分かったよ、歩水」

そう言うと歩水は嬉しそうに目を細めた。正直な話、僕も呼

び方に困っていたんで渡りに舟だ。そうじゃなければ、いきなり受け入れたりしなかった…と思う

「ところで、今度どこかに出掛けないか？」

「なんじゃ？また急に」

「いや、お前：歩水に世間の常識を体験させるのも良いかなって思っただ。具体的には遊園地に」

「父上が許さんじゃろ」

「いや、それがくれたんだよ。向こうで極秘に1人雇ったんだって」

「本当か！？本当じゃな？ よし、行こう！」

こうやって無邪気に騒いでると年相応に見えるんだけどね。そう思いながら、実は僕も結構楽しみにしていたりする。護衛の仕事は増えるのだが。まあ、歩水は妹みたいに内心思っているのですして苦にもならないだろうさ。

## 裕一の仕事場！（後書き）

今日は佐原 歩水さんをお呼びしました！

歩水「なんじゃ？」

いや、自己紹介をお願いします

歩水「説明も無しとは。まあよい。名前は歩水。年齢は数え年で18、今の数え方なら17じゃ。身長は170あるかどうかじゃの。他に聞きたいことはあるかや？」

食べ物関係と、自慢を1つ。

歩水「自慢はこの腰までかかる髪じゃな。手入れに四半刻はかかる。好きなものは……そうじゃな湯葉、かの。嫌いなものは虫焼きじゃへえ、やっぱ髪の手入れって大変なんだ。いや待った、虫焼きって何！？

歩水「冗談じゃよ。ウチに好き嫌いなどありません」

綾乃「あら、ピーマン嫌いじゃなかったかしら？」

歩水「綾姉、なぜここに！？」

綾乃「裕一さんから教わったの。それでは次回もお暇書き！！宜しくお願いします」

歩水「うう、ウチが言おうと思っていたのじゃが……」

……僕なんか後半喋れもなかったよ

歩水「綾姉はやはり手強いの」

いざ、準備！！（前書き）

遅くなりました。理由は夏休みボケと、お暇書きの作者の僕に暇が少なかった事です（オイ

では、どうぞー

いざ、準備！！

「ただいまー」

「あ、おかえり！」

「お帰りなさいですー」

てな訳で帰宅。ん、この声は秋ちゃんだな。ちょうど良かった。

「あのさ、2人共…って何やってるの!？」

2人は今、台所に立っている。しかしまあ、この惨状は何だろう。まずは、床。薄く雪が降ったように白くなっている。落ちている袋にホットケーキミックスと書いてあるからたぶん白い粉はそれだろうな。次にまな板。いや、既にまな板とは言えないかな。僕のお気に入りのまな板は厚さ3センチ程の木の板をそのまま使うのだ。それが薪のようにバラバラになっている。むしろどうやったのさ。さらに、フライパン。火も付いていないのに煙が上がっている。きつと火を消した直後なんだろう。いや、そう願いたい。

…極め付きはこの皿に違いない。パンケーキの形をしつつも、なんとこれは緑色だよ？

「どう？ 美味しそうでしょ？」

「緑色のパンケーキってちっとも美味しそうに見えないんだけど」と言うか、もはやアレは食べ物ではない気がする。

「裕一お兄さん、とにかく食べてみてくださいよー」

やはり、秋ちゃんも一枚噛んでるのか!？ そうなると食べざるを得ないじゃないか。ここ最近、秋ちゃんがかなり懐いてく

れていて無下に断ると泣きそうな雰囲気さえある。

「じゃ、じゃあ食べてみようかな」

もうこうなりやヤケだ。どんなものでも食べてやるっじゃないか！…そう思ってもやっぱり怖い！

「いただきます」

モグッ

「ねえねえ、どう…？」

「……………」

「どうですかー？」

「……………」

「「ねえ？」」

徐々に詰め寄ってくる2人。こ、これは何と言うか…

「…普通に美味しい」

普通にと言う形容詞は文法上でも正しくないかもしれない。が今回は物が物なので勘弁して欲しい。味については大雑把に言うとお好み焼きだ。緑色の原因はきつと青海苔だろうし、そのせいで色は出ていないがソースの味もする。生地はホットケーキの生地なので甘いのだがそれもまた良い感じだ。オヤツ感覚になっている。

「やったねー、優ちゃん」

本当に嬉しそうに笑う秋ちゃん。なんだかこっちまで嬉しくなってくる。

「なんだ。つまんないの」

「いやオイ待てやコラ」

優のとんでも発言に思わず語調が荒くなってしまふ。とりあえず、これはお仕置きが必要だな

「まあ、いいや。ところで秋ちゃん、今日家で用事とかある？」

「ないですけど、なんですかー？」

秋ちゃんは不思議そうに尋ねた。悪いけど秋ちゃんにも協力してもらわないとね。

「今日、家で夕食どうかな？」

「はい！ ぜひー」

…そんな嬉しそうな顔をされると良心が痛むな。

（30分後）

「さて、できた。2人とも、座ってて」

準備万端。さあ、始めようか。

「まず、秋ちゃんと僕の分。で、これは優の分」

そう言いながら優に皿を渡す。秋ちゃんと僕の所には普通のハンバーグを。優には緑色の不気味なハンバーグ状の物を。

「……」

それから何品か自分でも不気味と思う料理を優に出した。例えば、赤紫のスープ、赤いご飯（断じて赤飯ではない）。

「じゃあ、食べようか。いただきます」

なるべく平然と、バレないように。

「…あの、わたしの所だけおかしくない？」

「優、さつき食材で遊んだろ？ 僕が美味しいって言った時、つまらないとか言っただろ？ 食べ物を自己責任で遊ぶのは構わないよ。まあ、美味しい物を目指す前提はあるけど。でもな、そこに他人をむやみに巻き込むな。しかも、変な物を作って」

これは優より色んな経験があるから言える事、そして実際言うべき事なんだと思う。

「…ごめんなさい」

今ので反省したのか料理で反省したのかは分からないがとりあえずこれで良しとしよう。涙目には勝てないしね。

「そしたら、その料理と僕のを交換な」

そう言っただけの有無を言わず優の前の皿を持っていく。2人も目が点になってる。

「い、いいよ！ ちゃんとわたしが食べるから」

「いいよ。正直言っただけこんな際もの食べたくないでしょ？」

優は本当に分かりやすい。今だっただけまさしく凶星みたいな顔をした。

「それにね、一応新しく挑戦した料理なんだよね」

実はこれが本音。まだ自分も食べてないから食べてみたい。

「うん！！ おいしいー」

横からこっそり箸を入れたらしい秋ちゃんは声をあげて驚いた。

結局、何故かあの不気味な見た目をした料理は2人の胃の中に収まった。食べたかったのに。密かにショックで落ち込んだ。

「ところで2人とも、今度遊園地に行かない？」

食後、秋ちゃんがそろそろ帰ろうとする中に尋ねた。

「え、遊園地！？ 行く！行きまーす！！」

優は予想通りの即答。でも、今のは早すぎるって。反射の本新記録が取れるかもしれない。まあ、そんな記録無いけどさ。

「良いんですかー？」

こちらも予想通り。秋ちゃんってちゃっかりしてるけど意外と遠慮するらしい。

「実はね、今度遊園地に行く時に1人連れて行くんだけどそれでも良い？ と言つかむしろ来て欲しいんだけどダメかな？」

「いえ、こちらこそお願いしますー」

さて、準備は整いそうだ。後少しで。こういうのは準備が一番楽しかったりもするんだよね

いざ、準備！！（後書き）

どうでしたでしょうか？ 料理に関してはおそらく不可能ではないものを考えました。僕は料理をしないので現実とは言えませんが。

ちなみに、遊園地へ行く編は現実での1ヶ月を予定しています。そんなこんなで次回以降も是非お願いします！ あと、名前募集はまだしばらくは続きそうなので良ければご一考を。

1) 対面!! (前編) (前書き)

そんなに全体でも長くはないと思いますが敢えて前半後半にします。後、本当は本文に書きたかったのですが歩水の一人称『ウチ』はウの部分にアクセントがきます。実は、割とこだわってます!

1) 対面!! (前編)

時刻は午前4時。今日は本来休みなんだけど僕は歩水邸にいる。なんでボディーガードに休みがあるのかと言つと休日は歩水が父親(つまり僕の雇い主)の屋敷で過ごす為、向こうのSPが一括して仕事をするからだ。

しかし、今日はその父親が海外出張中でいない。故に僕が休日出勤してるのだ。

「フア、眠い」

大きな欠伸を一つ。流石に一晩中寝ないのはまずかったか。

「…ようじ」

ん、何か聞こえた。

「早く起きるのじゃー!」  
ガバツ!

一発で目が冴えた。しまった! うっかり寝てた!

「ふん、ようやっと起きたかの」

何故か不機嫌な歩水。しかし、今はそれどころじゃない!

「歩水! 今、何時だ?」

「ふん、挨拶くらいはしつかりするべきじゃな。今は6時ちょうどじゃ」

2時間も寝てたのか。ちょっと気抜きすぎだな。

「そうだね、おはよう。ところで降りてくれないか？」

歩水は今、マウントポジション通称馬乗りで僕の上にいる。

いや、重くはないんだよ？重くは。でも動けないからさ。

「嫌じゃ」

嫌って…。正直絵面は歩水に押し倒されたみたいになってるんだけど。そういえば、これ歩水のベッドじゃん！！

「そんな事よりも、あのよく分からん状態で寝てるのは誰じゃ？」

そんな事じゃないよ！？かなり凄い状態だからね？…久しぶりに取り乱した気がする。

歩水の指差した方には昨日の夜中に連れて来たもとい運んで来た優が寝てる。それ自体は良いんだけど、問題はその格好にあるんだよね。まず、上半身は寝かしたはずのソファから落ちている。優は結構、いや、かなり寝相が悪い。しかしまああれだけ頭に力がかかってたら普通起きるだろ。当然そんな体制だから服が捲れてかなり際どい。うっん、あんなに肋骨が浮き出てて良いのかね？

「アイツは優だ。戸籍上は僕の娘になってる」

「ちょ、なんじゃとおおお！?!?!？」

あら、珍しい。歩水がそんなに叫ぶなんて。って、さっきの優も起きたか。

「みゅ〜？ここどこ？ え！？あれ！？裕一は！？」

まだ寝呆けた状態なのか急におろおろし出した。何か怖がっ

てるようにさえ見える。

「おはよ、優」

少しパニックになり始めた頃僕は真後ろに立って声をかけた。

「ひう!?! 裕一!! 良かった」

優は何か大騒ぎして、急にホッとした。何なんだろう？

「挨拶くらいしたらどうだ？」

僕が優に向かって言った。いつの間にか横にいる歩水が「それはさつきウチが言ったのじゃ」とか言ってるけど気にしない事にする。

「うん、おはよ。その人誰？」

真横でジト目を向けている歩水について尋ねた。さて、ここが最大の難所だ。

「む、ウチかの？ウチは「こいつは歩水だ。まあちよいとした知り合い以上友達…ではないって感じの微妙な関係だね」

隣で「自分の紹介くらい自分でさせるー」とか騒いでるが黙殺するとしてよう。

「さて歩水、残りの話は朝飯でも食べながらにしないか？」

「良いの。早速準備するのじゃ」

「はいよー」

この屋敷には現在従業員は僕しかいない。その為、身の回りの事も僕の仕事になる。最初の頃は歩水から離れてボディガードになるのか悩んだ。今じゃその程度は悩みに含まないけど。

1) 対面!!(前編)(後書き)

意見、ツッコミ、感想、その他もろもろ待っています！  
次回もお暇書き! ! よろしくお願いします。

1) 対面!! (後編) (前書き)

初挑戦です!!

ちょっと不安ですが、どうぞ!

「対面！！（後編）」

僕は朝食を作るのにあまり時間をかけない。面倒だからね。そんな訳で10分程で出来上がった。歩水は朝をあまり食べないので量は優と2人の時と大して変わらない。

「して、裕一。そりゃ結局誰じゃ？」

「ああ、えーつとね「はいはい！わたし優！神流 優です！」」

うん、今のが優の紹介じゃなかったら間違はなくげんこつだったね。人の話を邪魔する奴に容赦はいらないからね。と言うかそれ以前に話が噛み合っていない。

「名前じゃなくの、裕一とそち…優じゃったか、では父娘にしては年がおかしいじゃろ」

やっぱり帝より頭が切れるな。お嬢様の実績は伊達じゃない。

「まあ、色々だね」

僕は曖昧で適当な言葉で逃げた。

「言わないのかの。まあ調べたら分かるじゃろ。どうせ養子やら従姉妹のどっちかじゃろっし」

…無駄だったらしい。全くもって嫌な奴だ。

「…今、間違いなく失礼な事を考えとったな。それより何故にここへ連れて来たのじゃ？」

本当に腹が立つくらいお見通しだ。

「この間遊園地行っって言ったでしょ？ 僕と2人で行っってもし

ようがないから優ともう1人優の友達の女の子連れて行くって思っ  
て。当日より前に顔合わせしようかなーってね」

本当は秋ちゃんも連れて来たかったんだけど、4時に連れ出す  
のはちよつとまずい。主に僕の立場とか人間性が。

「仲間外れはひどくないですかー？」

「うわぁー!？」

「わ!？」

いや、ビックリだよ！ 突然、秋ちゃんが後ろから話しかけて  
きた。

と言っか…

「どうやって入ってきたの!？」

ここのセキュリティは明らかに無駄だろうと言っくらいに厳し  
い。いくらなんでも、秋ちゃんには不可能だろう。

「今朝裕一お兄さんの家に行ったら知らない女の人が運んできてく  
れましたー」

「…もしかや裕一の師匠ではないかの？」

………よし、たぶん大丈夫だ。歩水の言った事はおそらくは  
間違いない。こんなセキュリティを生身で越えられるのは師匠くら  
いだ。少なくとも僕の知ってるのは。でも今は近くいないみたいだ  
…たぶん。

「して、今度は誰じゃ？また知り合いのようじゃが？」

「さつきもう1人いるって言ってた子で、名前は「秋です」。よろ  
しく願いますー。ふぎゃあ!！」

最近は人の話を遮るのが流行なのだろうか？ 反射で思わずげ

んこつが出てしまった。

「ところで3人共、この部屋から出ないでね、絶対に。ちょっと出かけるから」

その後歩水には小声で「師匠捕まえてくる」と言っておりあえず道具（捕獲用・護身用・その他劇物等）を取りに部屋を出た。歩水は一部とはいえ、師匠の恐ろしさを知ってるので一瞬渋い表情をした。はあ、行きますか。

む。裕一お兄さんがどこかに出かけちゃいましたー。

「そういえば、まだ秋には自己紹介してなかったの。ウチは歩水じや」

「本当におじいさんみたいな話し方なんですなー」

さっきの女の人が言ってた通りだー。

「…流石に失礼なじゃろ。一応初対面なんじゃぞ？」  
でも、だってー

「癖みたいなものじゃから気にせんでくれ。ところでさっきから気になってたのじゃが、あのカバンは誰のじゃ？」

うん、あんな黒いカバンは知らないから…

「あ、それわたしの！」

そう言つて優ちゃんが飛び付きましたー。歩水さんに避けられて頭から落ちて、痛そー。

「ひどいよ、ほーちゃん！」

「な！？ 何故その呼び方を知っている？」

「たつた今わたしが考えたの！」

「嘘じゃな」

「ホントだよ！」

さてさて、2人が言い争いをしてる間に優ちゃんのカバンの中身を見ちゃいましょー。

「…歩水の成長期。アルバムですか？」

どれどれ中身も見てみましょー。

……ボタン

ちよ、ちよっとビックリですー。すごく恥ずかしい写真ばっかりですよ？

「秋、何を見とるのじゃ？」

なんかくすぐり合いになりながら歩水さんが聞いてますー。

「歩水の成長期ってアルバムですー」

ちよっとニヤリ

「みみみみ、見たのか！」

あゝ目が回るー。そんなに揺らさないでくださいー。

「みゆ」

くらくらするー。真っ赤な歩水さんがたくさん見えますー。

「何なに？ わたしも見たい！」

優ちゃんの声が頭に響きますー。

「ぜぜぜ絶対に見せんぞ！」

パニックになった歩水さんも可愛いんでもっと見たいけど、ちょっと目の前が白くなってきましたー。  
きゅーバタン。

「秋（ちゃん）！？」

1) 対面!! (後編) (後書き)

秋ちゃんもの凄く楽しいです!個人的には動かしやすいし。ただ読んで下さった方がどう思うか……

歩水の成長期と裕一のその後は後日談とかやるかもしれない。あくまで「かも」ですがw

次回もお暇書き!! よろしくお願いします!

**G o t o 遊園地！(前書き)**

……テストが終わりました。 ……二重の意味で(泣

## Go to 遊園地!

ふ、不安だ。

僕は、正確には僕達は今遊園地の前にいる。ここまでの道のりは想像以上に疲れた。正直すでにぐったりです。やっぱり歩水と電車で出掛けるのは無謀だったらしい。

「ほ、思ったより人が少ないの」

歩水はこの目玉の異常にでかい観覧車を見上げながらしみじみと呟いた。

「休日だし結構混んでるよ、これは。むしろどんなイメージしてた？」

「む、今朝の電車みたくなくなってるかと思ったんじゃないか？」

「いや、あんな満員電車じゃ身動きも取れないから」

それにしても今日の電車は混んでたなあ。休日なのにラッシュの最中みたいだったし。まあ、僕はラッシュに電車は乗らないけどさ。

「ねえねえ、早く行こう！」

優はもう待ちくたびれたみたいだ。

さて、行きますか。

「よし！ 裕一、ジェットコースター行こ！」

いきなりだな。優や歩水はともかく、秋ちゃんは大丈夫だろうか？

「わたしなら平気ですよー。あのジェットコースターは人気なんで早く行かないと混んじやいますよ？」

「そうだね。じゃ、あのジェットコースターにしようか」

「ジェットコースターは始めてじゃの！」

目をキラキラ輝かせる歩水。あれ？優は…ってもう一人突っ走ってる！！

いや、秋ちゃんも！？まずい、置いてかれる！

「急ぐぞ、歩水！」

「え？ や、止める！ 担がんでくれー！」

優は何も無くても僕より早いのでぶつちぎりで行って待っていた。秋ちゃんは途中ではてて、そして何故か僕の背中にあった。歩水はずっと僕に担がれながらバタバタしていた。しかもこの遊園地無駄にでかいよ！

「ハア…ハア…、止めると言うに。かなり恥ずかしかったぞ」

そう言うのは真っ赤な歩水。まあ、確かに辛かった。容姿だけはもの凄い美人なんで周りの視線は痛かったし、長い髪に視界を阻まれた時はかなり危なかった。

「はーやーくー、乗ろうよー」

優は休む暇なんて無いと態度で主張。……ああ、今日一日もたないかも。

安全レバーを下ろし、準備万端な僕達。因みに座席は最前列に優と秋ちゃん、歩水と僕はその後ろに座っている。なんでさつきから歩水はしきりにキョロキョロしてるんだらう？

「時に裕一、ジェットコースターとはどんな乗り物なんじゃ？」

「え、まさか知らずに乗ってる？」

「そのまさかじゃ。一体どうなるのじゃ？この苦しい棒も要らんのではないか？」

まずい。歩水がジェットコースターを知らないのは誤算だった。

「えーつとな、『それでは行つてらっしや〜い』とにかく、頭を後ろに付けてその棒をしっかり掴んでろ」

…護衛対象がシヨック死しそうな気がする。

段々上がって上がって……

「裕一、上がったら下がらにゃいかんぞ？」

ガタン

無機質な音と共にジェットコースターが止まる。これの特徴の一つが最初は落ちる前に一回止まって眺めが見えるようにするという苦手な人への死刑宣告だ。

「まさか…の」

歩水の顔が恐怖でひきつった

ガタン

その音と共に動き出す

「いや、え、きいやあああああ！！！！」  
歩水パニック

ここから先は歩水の名誉の為に割愛する。ものすごかったとだけ  
言っておこう。

「も、もう…嫌じゃ…。あんなものは二度と乗らん」  
ぐったりな歩水。心なしか顔が青白い。

「いやいや、面白かったじゃん！もう一回乗らない？」  
「えー、別なのに行こうよー」  
対照的にこの2人は元気そうだ。いや、優、もう一回は勘弁  
してくれ。

〈5分後〉

「うーん、あのコーヒークップはー？」

「お、良いね！それにしよ！」  
そう言って優は一番乗りだーとか言いながら走っていった。  
本当にテンション高いな。しっぽ振ってる仔犬そっくりだ。

「裕一お兄さんも行きましょー」  
そう言って手を引く張る秋ちゃんはそのうだな…ウサギかな  
？このポンヤリした雰囲気とか。

「そうだね。歩水はどうする?」

「行くに決まっとる」

「大丈夫か?」

この5分で大いぶ良くなったとはいえ、まだ疲れた顔をしている。

「ジェットコースターと違って落ちたりせんじやる?なら大丈夫じゃ」

「乗ったことは?」

「もちろんない!」

じゃあその自信はどこから湧いてるんだ。

「ふむ、これをできるだけたくさん回すのじゃな?」

優がメチャクチャな事を歩水に吹き込んだ。ここのコーヒークップは4人で乗れるやや大きめなもの、つまり運命共同体だ。…

…これ酔うから苦手なんだよね。

『それではお楽しみくださいね』

死刑宣告もといスタートのアナウンスが流れる。優さんや、そんなに速く回さんでくれ。歩水もなんでそんなに乗り気なんだよ!?

「いや、なんか異常だつて!おかしいつて!なんか目を回すとかそんな次元じゃないから!?!?!?!」

「イエイ!もつと早く!」

「あ〜れ〜。めーがーまーわーるー」

「お、なんか周りの景色とか頭がぐらぐらするんじゃないか？」

「ふふふ、それがこのアトラクションなのだよ歩水ちゃん」

「む、ちゃん付けは気に食わんが確かに面白いな優よ」

「だしよでしょ！ほら、秋ちゃんも…って伸びてるや」

「秋は情けないな。裕一はどうじゃ」

「…お前ら…よく平気だな…今でも、周りの人達の2、3倍…速い、から…」

「裕一も情けないな、まだまだこれからでしょ！」

この後から終わるまでの僕の記憶はかなりあやふやになっている。ひたすらに耐えていたけど、さらに回転数が跳ね上がった時は意識を失う寸前だった。…アトラクションとしては最低だな。

秋ちゃんは今ベンチで横になっている。…何故か僕の膝枕で。歩水は吐きそうじゃ、とか言いながら座って背もたれに全体重を預けている。

優はと言えば、待たされているのが不満らしくム〜っと口を尖らせジュースを飲んでいる。どうやらこのアホ娘は遊園地では無敵らしい。

G o t o 遊園地！（後書き）

遅くなりました。理由は前述の学生の敵のせいです。  
テストなんか、テストなんか、大っ嫌いだー！！

G o t o 遊園地！2（前書き）

テスト……無事でした！  
てな訳で、後半をどうぞ

## Go to 遊園地！2

あれから暫くの後、僕らは昼食を食べた。歩水と秋ちゃんのダウン組はあまり食欲が無かったけど。ホットドッグを初めて見たという歩水が必死にそれを頬張る様子はたまらなくおかしかった。

まあそんな事は今はどうでも良い。一つ言いたいのは、

「昼食後最初に来る場所じゃないでしょ……」

目の前には古びて汚れた禍々しい雰囲気を作った洋館。いわゆるお化け屋敷だ。肝試し以来この手のものはすっかり嫌になっちゃったからなあ。

『…それでは一グループずつお入りください』  
遂に僕の戦いは始まった。

「け、結構怖いの」

「ですねー」

「ちつとも怖がってない気がするんじゃないか」

「うふふふふー、気のせいですー」

しかしまあ、このお化け屋敷異常に怖い。昔惨殺事件のあったという設定も実は嘘じゃないのかもしれない。例えば、すっかり乾いた血糊の池が水風船を破裂させたように広がっているのが既に4、5ヶ所あったし血で書かれた文字は数えきれない程だった。でも、洋館なのに全部日本語なのはこれ如何に。

「裕一お兄さん」

ふと、秋ちゃんに呼びかけられる。

「なん…うわぁ!?!」

か、か、顔がない!のっぺりしてるじゃないか!

「どうしたんじゃ、裕一?」

歩水も異変に気付いて……ってこっちも顔がない!

「あ、え、いや…」

いやもう雰囲気が悪化しただけにもはやパニックでっつてああえつとその「くくくく、もう良いかの」

「そうだねー」

パカッ

ええ!?! 2人は顔に付けていたお面を外して大笑いしている。どうやら謀られたらしい。

「すまんの。つい、な」

暫くしてようやく落ち着いた歩水は悪びれない。本当に怖がってしまった為言い返す立場にないのが悔しい。

「ところで優はどうしたんだ? まさかまだ何かやる気か?」

中高生相手にここまで疑うのも我ながらどうかと思う。それでも疑うけど。

「いえ、優ちゃんはばらしちゃいそうなんで仕掛け人にはしませんでしたよー?」

じゃあ、優は何処に?

「ウチは知らんぞ」

「右に同じですー」

本格的にまずい。いくら暴走機関車みたいな奴とはいえ、優も一応女の子だ。お化け屋敷に置いてきぼりは流石に人道に反する。

「あ、みんないた!」

なんだ、すぐ後ろにいたみたい……………ゾ、ゾンビ!?

「ひっ!?!」

「……………」

短い悲鳴を上げた秋ちゃんと、もはや悲鳴が声にならない歩水。僕もきつと似たような状態になっているだろう。あれが優とは信じられない、いや、むしろ信じたくない。

暗がりの中でもわかる程にくすんだ、というより灰色の顔。目玉は片方が異常に大きく見えるし、もう片方は陥没しているように見える。口は両端から赤黒い血のよだれがはったようだ。なので、これで髪が赤くなければ優とはわかるまい。

重ね重ね言うがここは暗い。そんな中でもわかる程全てがくつきりしている恐怖は並々ならぬものだった。

秋ちゃん脱落（気絶）

歩水、僕の腕を両腕でがっちり掴んで僕の背中に隠れている。軽くだが腕が極っている。

「もう大変だったよ。途中でこのメイクさんに捕まってあつという間にこの顔だもん」

そう言いつつも優が楽しんでいたのはにこやかな表情と口調で分かった。その顔でにこやかなのはかなり怖いけど。

そこから先は特に何もなく無事に終えた。まあ、気絶した秋ちゃんを背負いながら完全にびびっている歩水と手を繋いだり、お化け役の方々が出てくる度に優に驚いて声を上げて逃げるのを見たりするのは何もなくならない気はするけどさ。

その後は園内でお土産を買ったりゲーセンに行ったりした。3人でUFOキャッチャーに夢中になっているのを見るとやっぱり子供だなと思った。因みに予想通りと言っべきか歩水はゲーセンも初めて見たそうだ。

そんなこんなで時間は巡り、最後に大観覧車に乗ることにした。何故か1台には2人しか乗れないので僕と歩水、優と秋ちゃんに別れた。故に今日の前には歩水がいる。

「今日、楽しかったか？」

無言に耐え兼ねて僕は尋ねた。歩水はずっとにこやかだった。

「楽しかった、の。初めてやら不思議が多かったから」

そう言うと歩水は目を閉じた。疲れたのだろう、しかしその表情は今も生気に満ちている。

「おやすみ」

そうして僕は1人傾いた太陽を眺めることにした。

その30分後に同じく寝てしまった優と秋ちゃんと歩水を両肩と背中に乗せて帰るのは、まだ先のお話。

G o t o 遊園地！2（後書き）

さて、次回までを一連の話にする予定です！  
次回もお暇書き！！ どうぞよろしく！

余談ですが、同級生のK君読んでくださり感謝です。これからも何  
とぞよろしくです。

A f t e r s t o r y ! (前書き)

遅れましてすいません！しかも短くてさらすいません！！

## A f t e r s t o r y !

「ンだよ、私も誘えよ」

「分かったから、もう何度も言うなって」

帝のヤツ、酔ってきてるな。さっきからもう4、5回は同じ事を言った。

しかしまあ、行きたかったんか。アレに。

なんで僕が帝と一緒にいるかと言うと、これはもう少し、具体的には1時間程前の話になる。

遊園地から(3人を背負って)帰った僕は完全にはてて微睡んでいた。いたのだが、ケータイに着信が入り睡眠を断念、やむなく返事をする。帝の怒鳴り声が聞こえ今に至る。

なんでも、僕は今日飲む約束をしていたらしい。

恨むよ、過去の僕。このタイミングはないだろう。

てな訳で冒頭に戻る。因みに場所は近所の焼き鳥屋。二丁の店長とはそれなりの知り合いなんで…

「裕一君、帝ちゃん放つといて別の娘と遊ぶたあ感心しねえな。彼女なんだろ？え？」

「馬鹿言うなって。ほら、帝からも何か言ってやれ」

「だよな。流石おやつさん！話が分かる！」  
「もしもし、帝さん？何言ってるか分かってる？」

「当たり前だろ？たくよ、歩水って娘が可愛いのは知ってるし優や秋もなかなかだけどよ、そんなに年下が良いのかよ？このロリータめ」

「いやいや。違うからね？しかも「私だってそんなに悪くないだろ……」って脈絡が無いから。」

でもまあ、これだけ酔ってるなら何やっても…ね

「すみません、ウーロン茶一つ！」

「ちえ。酔ってる帝ちゃん、かなり面白いんによ。ま、醒めてからも見物か」

人の気も知らないで。この後大騒ぎになるこつちの身にもなって欲しい。全く、ウーロン茶一つで完全に酔いが醒めて記憶が蘇るってどんな体質だよ。

「ほら、この一杯は僕が奢るからさ。飲んでくれ」

「あん？まあ奢りならもらうけどよ……ゴクツ……ッ！てめえ！これウーロンじゃねえか！」

余談だが帝はウーロン茶が死ぬ程嫌いだ。なんでも酔いが一気に抜ける瞬間の感覚が嫌なんだそう。

「酔い覚めた？」  
とりあえず確認。これ以上絡まれるのは体力的にもキツイ。

「ああ、すっかりな。……………裕一！忘れる！いや、むしろお前は何か覚えていないぞ！良いな！とにかく忘れる！」

は？帝が真つ赤なのは何故？全く意味が分からないけどなんで錯乱してるんだろ？

「何の話だよ？」

気のせいかさつきよりも面倒になった気がする。

「ちえつ。この鈍ちんめ」

スゲー失礼な事を言われたよ。小声なのに全部聞こえる辺り隠す気すらないっばい。

後日談なのだが、この後さらに飲み続け僕の睡眠は1時間になった。今日のしんどさも凄かったが、明日からしばらくは楽できない。それはまた別のお話。

A f t e r s t o r y ! (後書き)

これで一通り終わりました。これからもまたグダグダに変わりはありませんがw

全体を通して評価、感想、ダメだしその他待ってます！

優「じゃ、次回もお願いしまーす！」

うわ！いつの間に！？

優「D吉、わたしに不可能はないのだ！」

……では、また次回。doubter でした！

## 嵐の到来！（前書き）

遊園地に行つてから丸1週間が経つた。この1週間はビクビクし続けた。良い加減覚悟を決めるべきだろう。そう、思つてはいたさ。

by 裕一

## 嵐の到来！

「優、起きろー。というかソファで寝るなって風邪ひくから」

時間は午後6時、曜日は日曜、僕は優特にする事も無くやる気もない休日をダラダラ過ごしていた。しかしまあ、それなりに年頃の女の子がソファで爆睡してるのはどうかと思う。

「…イヤ。眠いもん」

はあ。そんな呆けた顔で言われたら怒れないじゃないか。でもイタズラくらいなら悪くないかな。さて、どうしよう

バターン！！！！

「なんだ！？」

玄関の方からスゴい音がした。ドアが開いたような気がしたけど鍵を閉めてあるからそんなはずないんだけど…

「いや、相変わらず鍵つてのは鬱陶しいな。お、裕一！どした？そんなに慌てて」

最悪だ最悪だ最悪だ。何とかして早めに追い出さなければ！

「どした？、じゃねえよ！なんでドア壊してるのさ！しかもそのドア鍵がかかってたはずだけど、まさかそれごと壊したのか！？」

「ああ。ま、いいだろ？元はオレン家みたいなもんだし」

そう、今まさに目の前にいるのが僕の師匠こと滝 鼎だ。余談だがここはちゃんと僕の家だ。うん、やっぱり余談じゃなく重要だね。

「うっん、裕一？何？今の大きな音」

騒ぎに目を覚ましたらしい優が寝ぼけ眼を擦りながら玄関口の廊下に出てきた。優は本当にタイミングが悪い。と言うか運がない。なんてたつて…

「ハグツ！君、ホント可愛いねっ！あー、もう最高！！」

「ひよえ！？な、何これ裕一！？」

師匠は気が付いたら優に抱き着いて頬擦りしていた。実際、目の前を通り過ぎたはずんだけど全く見えなかった。風すら後から来た。相変わらず化け物じみた人だと思う。

「師匠は1回離れなさい。優がパニック起こしてるから。ほら、靴脱いで玄関に置いてきて」

僕が高校を卒業して師匠が今のような生活をするまではこんなやり取りは毎日だった。我ながらどっちが保護者か分かったもんじやない。

「ムム。はい」

何故か不満そうに師匠は靴を脱ぎそれを玄関に持っていく。

「裕一、あの人誰！？」

優が耳元でヒソヒソ声で話した。微妙にくすぐりたい。

「前に言ってた師匠だよ」

「嘘！？だつて、だつて、ええ！？」

優が驚く気持ちもまあ分かる。師匠は若く見えるくらいには童顔なのだが、一番驚くのは彼女の見た目が僕と初めてあった時から変わってない。もはや分類的には化け物とかエイリアンで良いと思う。

「師匠さんっていくつなの？」

「確かね……………」

バコツ

「裕一 歳はやっぱり禁句だろ？」

ちっとも笑ってない目の恐怖つてのはもの凄い。マズイ、殺られる！

「ま、今回はオレの機嫌も良いし後回しか見逃しだな。それより飯にしようぜ！腹減つてよ」

「いきなり来ても、準備が無いから大した量はおせないから」

ひとりごちつつ、僕は料理をする事にした。なんと言うかゴメン、優。

「さて、オレはこの子で遊ぶかな ……名前なんだっけか？」

「優です。さつきから知ってたよね？」

「まあね。うゝん、ハグツ！」

「みぎゃあああああ！！！」

（20分後）

「ご飯できたよ……………って優、大丈夫？」

「いや、もう無理かな」

優がぐったりしてるのを初めて見た。加えて言えば、寝起き以外でテンションの低いのも初めてだと思っ。

「本当に優ちゃん可愛いな。夏見た以来だけど予想以上だね、

「りゃ」

当のセクハラ魔神は満足げだ。いや待て

「夏見たってどういう事？」

僕に会った記憶は無いんだけど……

「うん？お前ならとっくに気付いてると思ったんだけどな」

「だからどういう事なの？」

「お前ら夏に墓地に行ってただろ？あん時オレも行ったんだよ。でもミイラは失敗だったな！。てか、裕一は俺にツッコミ入れたじゃねえか」

あの時のミイラか！あれが師匠だったならもの凄い納得がいく。いや、納得したくなかったけど。

「ミイラなんて見なかったよね？」

いや、残念ながら見たんだ秋ちゃんもばっちり見てるはずだ。

「…鼎さん怖い」

優が怯えている。今日は優の初めて見る表情ばかりだなあ。

「「ごちそうさまと。さてと、オレはそろそろ行くところかな」

「もう少しゆっくりしてってもいいよ？」

見てる分には優の百面相はなかなか面白いし、決して言えない本音だったりする。

「ま、また近いうちに来るだろうさ」

うーん、それはまた……。あれ？そーいえば

「今回はなんで来たの？」  
師匠は基本的に何か理由がないと家に来ない。稀に例外で僕に絡みに来るけど。

「おお、そつだそつだ。実はなお前の妹、ひよつとすると会えるかもしれない」

「え？」

師匠が僕の為に妹の手掛かりを探してくれていたのは知っていた。でも、まさか、本当に…

「まだはつきりとは言えないから期待はするなよ。じゃな！」  
そう言つて走り去る師匠は本当に嵐みたいだどつくづく思う。実際速すぎて風すら追いついてない。

ところで、ドアをどっしり叩く。

嵐の到来！（後書き）

と言う訳で師匠こと鼎さんの登場でした。ミイラに関してはもう一度読み返してみてください！  
覚えていた方々には感謝を。

優「つ、疲れたにゃ」

結構弱ってるね。やっぱキツイ？ニヤニヤ

優「鼎さんはもう完全に天敵だよ！」

分かったから、そんな泣きそうな顔しないでって。

鼎「ヤッホー！鼎だぜ。次回もお暇書き！！よろしくな。ではさらば」

うわー！！ビックリしたー。そしてセリフとられた。とりあえず次回もよろしく願います。

優「あ、危なかったよ」

いっ コタツ！（前書き）

やや短いですが、すいません。没ネタが出たもので…  
それにこついつ話って難しいですね（苦笑） 難産でしたよ、ええ。

i n コタツ!

「裕一、早く早く!」

「いや…結構…よいしょ…重たい…って」

「むむ、失礼な」

そうは言っても、見た目以上に重たい。油断すると落としてしまっ  
まいそうだ。

去年こんなに苦労して運んだっけ、コタツ。

「よっこらせつと。優、そろそろ降りてくれ。結構つらい」

ま、半分くらいは背中に張り付いてた優のせいだけどね。

「コンセントよーし、スイッチON!いざ突入!」

優は降りたと思ったたらあつという間にコタツに潜った。でも、  
なんで頭からなんだろ?

「おーい、頭危ないぞー」

とりあえず僕も入ろう。もちろん足から…ね。

「やっぱり暖かいな」

「うん、ぬくぬくだね」

僕は普通に足を入れ、優は顔だけを出して体全体を中に入れて  
いる。なんと言うか特大の亀みたいだ。んで、優の足が僕の隣にあ

る。

僕も優も風呂に入った後だからパジャマ姿だ。優が着ているパジャマは桜色を濃くしたピンク色をしていて柄もやや子供っぽい。いや、まあ似合ってるから良いんだけどね？

話が反れたが、パジャマってのは裾が上がってしまいやすい訳で、まあ、その、つまり、まくり上がった素足がある訳で。しかもそれが結構色っぽいときてる。

いや何を言ってるんだ僕は！？ 風呂上がりで頭がのぼせているらしい。うん、そうに違いない！

「さつきからなんで首を振ってるの？」

ふと見ると優は既にきちんとした姿勢で座っていた。顔をべつとり机にくつつけている姿勢がきちんとしたと言えただけだ。

「いや何でもない」

「嘘なのがバレバレ」

そう言っつて、次に優はさつき足があったところからひょっこり顔を出して僕を見上げた。

こうやって見るとやっぱ仔犬に見える。これだけは初めて会った時から変わらない。ずいぶん慣れた感じはするけど。と言っつか、こうしてる分には色っぽいとか思わないんだけどなあ。うん。

「そんなにわたしを見てて楽しい？」

「うわ！？」

気が付いたら優が目の前にいた。息のかかりそんな距離で。

「裕一今日何かおかしくない？ぼーっとしたり、首思いつきり振ったり。あ、もしかして！」

「もしかして？」

「笑いたくなるキノコを食べたでしょ！」

「んな事あるか」

ちなみに原因は君なんだけど、ね。

「じゃあね、じゃあね、うーんと」

「うーんと、何だよ？」

気になるじゃないよ。

「うーん、恋煩い？」

え？いや、まさかね。ハハハハ、ハハ。まさか。

「とすると相手は帝先生かな？」

「いや、それはないって」

「じゃ歩水ちゃん！」

「余計におかしいでしょ!？」

変な事を考えた僕が馬鹿だった。……………だよな？

i n 「コタツ！（後書き）」

この先どうするか、どうなるかをまだ決めかねてます。裕一君どうするでしょうねw ロリコンに彼は目覚めるのでしょうか！！

ニヤニヤしながらこれからも読んでいただけたら嬉しいです。

裕一「……なんか色々気に食わないな」

裕一君、いつの間に！？

裕一「最初からいたよ。…覚悟はいいよね？」  
すいませんでした！

裕一「とりあえず、次回もお暇書き！！お願いします。さて、じゃ  
……」  
た、助けてー！

## サンタクロースの真似事を！（前書き）

テストも終わりましたので時期的にもここから年末年始の行事シリーズ始めます！！  
ではでは、第1弾クリスマス関連をどうぞ！

## サンタクロースの真似事を！

「帝、僕と付き合ってくれないか？」

「……………へ？」

遡ること30分。の話。

僕は非常に悩んでいた。おそらく今年一番の悩みようだと思っ  
どうするのが最善だろうか？しかし、悩んではかりでは事は進展し  
ない。

今年のクリスマスをどうしようか？

より正確にはクリスマスプレゼントをどうしたら良いのか僕は  
分かっていない。元々クリスマスは去年は将と帝の3人で呑み明か  
してたし、師匠の放浪癖がひどくなるまでは師匠に付き合っていた。  
それでも、中学生にウイスキーを勧めるのはどうかと思う。飲んだ  
僕も馬鹿だったけど。

話は逸れたがつまり、僕の今までの生活にはクリスマスプレゼント  
ントという概念が無かった。しかも相手は女の子。何をあげたら良  
いのか全く分からない。

ここで冒頭に戻る。

「……あのさ、マジで？」

「うん。優にクリスマスプレゼントを買いたいんだけど、どんなものをかえば良いのか困っててさ。帝は一応女だし」

「……そういう事か。そうだな、発言後半の非礼を悔い改めるなら協力してやる」

「すみませんでした！」 最初の方は何て言ったかわからなかったけど、とりあえず助かった。冗談が通じなかったのは実に惜しいけど。

「なんか納得できねえけど。ま、行こうぜ」

そして僕らは近くのショッピングモールに来ている。近いと言っても軽いお出かけくらいの距離があるが、その分様々な店舗が軒を連ねていて買い物には非常に便利な場所だ。今もモール内は人で溢れかえっている。カップルが多いのは面白くないけど。

「んで、何買うか決めてんの？」

帝が突然歩を止めて尋ねる。

「いや。正直どんなものが良いか分からなくて。だから帝に相談しようと思って誘ったんだよね」

「うーん、じゃああの店見てみないか？」

そう言って帝が指した先の店は赤い看板の洋服店で、確か今女性に人気の高い所のはずだ」

「……………服か。因みに理由は？」

「ほら、優ってあんま服持ってないだろ？」

「失礼な。ちゃんと困らない程度には持ってる」

「バカ。着られれば良い服じゃなくて、何て言うかこう………もっと女の子みてえなヤツ。優はあんまりそういうの持ってないだろ？」

むむ、言われてみれば確かにそうだ。僕はあまり服に頓着しないから考えなかったな。優もオシャレとかしないし。

「じゃあ、見てみようかな」

そう言っただけで店内に入ると外よりもカップル率が高いし、女の子達だけのグループも多い。何と言うか、僕はそのどちらでも無いのでなかなか居づらい。

「お、こんなのどうだ？」

そう言っただけで帝が取り出したのはドレスのような型の真っ赤なワンピース。フリルなんかも付いていてわりと可愛いと思う。

「誰かへのプレゼントですか？」

うわ、店員さんに捕まってしまった。どう対応して良いかわからなくて個人的には結構苦手です、はい。

「いや、娘に服を買おうと思って」

「幼児用でしたら、あちらの方です」

「いや、娘は14歳です」 店員さんの目が丸く見開かれた。僕の見たと噛み合わない事に驚いてるからだろう。自分で言うのもなんだけど、僕は老け顔よりは童顔に近いし。以前、高校生と思われた時に凹んだ経験もある。

「ところで、奥様の服もお探しですか？」

「奥様って？」

何か噛み合わないな。僕は独り身なんですけど、と心で呟く。

「先程まで一緒におられた方は奥様では？」

……なるほど。帝の事が娘がいて、隣には女性じゃ事情を知らなきゃ当然の帰結か。納得できないけどね。

「いや、アイツは妻じゃなくてあくまで友人ですよ」

店員さんの僕を見る目に一瞬軽蔑の色が混ざった。心なしか周りの目も冷たい。

「ところで、アイツがどこに行ったか知りませんか？」

「あちらの方に行きましたよ」

慌てて話題を変えようと適当な事を聞いたけど、店員さんから離れるチャンスができた！この流れで…

「あー！」

何故か店員さんの顔が赤い。そして急に話しかけられたので、思わず振り返ってしまったじゃないか。くそう、逃げそびれた。

「余計なお節介かもしれませんが、その……ふ、不倫は良くないと

「思います！」

「余計なお世話以前に完全無欠の勘違いだから！しかも大声で言う事じゃねえ！」

周りの視線が冷たいを通り越して痛い！女性のヒソヒソ声だらけだし！……僕の声の方が大きかったけどもうそれくらいは許して欲しい。

「行くぞ、帝！」

そのやり取りの直後、帝を捕まえて（首根っこ掴んで）完全に逃げ出す感じで店を後にした。

「なんだよ、せっかく色々見てたのによ」

やや膨れっ面の帝。事情を話すのも気が進まない、と言うより嫌だ。

「服はやつぱなしで。他を頼む」

「なんでだよ？わりと乗り気だったじゃねえか」

「まあ、色々…ね。それより第2候補は？」

誤魔化して次に話を勧める事にした。機嫌の悪さの原因の話をずっと続ける理由はないからね。

「む、じゃあアクセサリなんてどうだ？」

なるほど。優は飾りっ気が無いからそついう類のモノが良いのか。

「じゃあ、それで」

次こそは良いモノを探そうじゃないの。

うん、なんと言いか意外なことが多かった。例えば、帝が貴金属やら宝石で目を輝かせていたし、そもそもしっかりしたアクセサリーがこんなに高いとは知らなかった。感想は帝もこういう時はちやんと普通の女性なんだな、つてのと予算大丈夫かな？つて感じで。まあ、予算なんて決めてないけど。内心では、家が傾くような値段じゃなければ、いくらでも出す気にいる。

さて、閑話休題っと。

アクセサリーの趣味や嗜好について帝に尋ねたら

『それは渡す人間のセンスだろ』

とか言われて何もヒントをもらえなかった。

「…どうというのが良いんだろ？」

暫く見て回ってそろそろ1周する。まだ良いものが無い……

これだ！心の中で思わずガッツポーズ。ショーケースに入ってるから値段は結構、かなりのレベルで張るけど、家が傾く程の値段（≡予算内）だ。何よりモチーフが良い。個人的には最高で、品物に一目惚れつて実在するんだなと実感した。

本当は帝にも相談すべきかもしれないけど、もはやこれ以外にする気もないので購入する。給料に関して気前の良い歩水に感謝。もちろん声に出さずに。

その後は、クリスマスに必要なモノを買い込んで帝に昼食を奢らされつつ一緒に食事をして帰った。こうやってると普通のカップルみ

ただよねって何気なく言っただつもりの一言に盛大に吹き出した帝  
は見ものだったし、お互い楽しめたと思う。

さて、仕込みは上々。後は結果を楽しもうと。

サンタクロースの真似事を！（後書き）

次回もお暇書き！！よろしくお願いします。

そんな僕らのクリスマス（前書き）

クリスマスです！ 前から1度やってみたかった全員の視点に挑戦  
しました！では、どうぞ

## そんな僕らのクリスマス

「裕一、やっぱお前が言えって」

「ん、分かったよ。じゃあみんなグラスを手に持って。では、メリークリスマス！」

『メリークリスマス！』

カチャン！

そんな訳で始まるクリスマスパーティー。人数が6人と僕の経験する過去最大規模のパーティーになった。歩水と秋ちゃんも誘い、帝と将は毎年の事で優は言わずもがな。当然のように参加。まあ、会場がウチの時点で居るに決まってるけど。

「しかしこれだけ集まるところではちと狭いの。裕一の家ではなくウチの屋敷を使えば良いではないか」

歩水はちよつと不満そうな態度。とりあえず本人を失礼な、まあでも、確かにこれだけ揃うとごく普通の広さしかない我が家は「ちと」以上に狭い。食べ物も置いてあるテーブルもスペースもぎりぎりで、取り囲む人間の方も動けばお互い肩肘が当たる。それでも理由は一応あって

「あそこは広すぎて料理を運ぶだけで一苦労だから却下」

料理を途中で作って足す役割が僕なので遠いのは致命的だ。僕だって参加したい。

「おい裕一、早速皿頼むぜ」

声を張り上げる将。確かあの周りは食欲組（将・優）だったはずだ。秋ちゃんと歩水の前の皿はまだ半分以上残っている。

「了解した。だけど将、お前はこっち側、つまり料理担当だぞ！」

「えへ。ま、しゃあないか」

よっこらせつと、ようやく立ち上がった将と共に台所に移動した。

「ふふ、こついつのを時代が変わったと言っんじやるうな」  
きつと歩水こつも裕一とアホ将が台所に行った話だろう。

「だよな」。まあ、優と秋は裕一の家じゃ料理禁止なんだろう？」

以前裕一にこつぴどく怒られたって秋が落ち込んでたからな。というより半泣きだった。んで、あたしと一緒に謝りに行ったんだが、裕一がまたひどく狼狽えててなかなか見ものだった。うん。

「それはタブーですよー！」

「ほう。帝さんや、後で教えてくれるかの？」

ニヤニヤ顔の佐原ほみず。こいつ実はあたしと気が合うと見た！

「おう。任せとけ」

そう言っつて横目にむくれた秋を見てニヤリ。前を見れば佐原も同じ事をしていてさらにニヤリ。間違いなくあたしの同族だな。

ちよつと今後が楽しみになったあたしのクリスマス。

「ほら、料理できたよ」

「ったく、裕一人使い荒くて。大変だったぜ」

まあたくさんの料理を作ってたみたいなので仕方ないですけど  
！。

「あれ、秋ちゃんどうかしたの？なんかムスツとしてない？」

むむ、凶星なのがまた気に入らないのです！。

「裕一、お前のせいだろうが。秋は一人っ子のくせにかなりのお兄ちゃん子でお前がお気に入りにムグツ！」

はあはあ、何口走ってるんですかこの教師はー！

「うーん、けど秋とは俺のが付き合い長いんだが俺は全くだぜ？」

「裕一お兄さんと将じゃ格が違いますよ」

当たり前ですよー。

「……まあそ落ち込むなって」

何故か落ち込みながら愕然とする無駄に器用な将をフオローする裕一お兄さん。ホント良い人ですね！。

「秋ちゃん、そんなにくつついてると動きにくいんだけど」

「ふふふー」

コタツにいるけれど更に暖かくて幸せです！。そんなわたしのクリスマスー。



うん、たまたま思いついただけなんだけど。まあいいか。

「なーいしょ！」

にっこりと笑みを作ってわたしは答えた。

「……裕一じゃな。覚えておれ」

何か勘違いした歩水ちゃん。嫌がってるみたいだからこの呼び方はやめようかな。そんなわたしのクリスマス。

「帝さんと将君や、ちょっと来とくれの」

計画実行。優にははぐらかされた感が残るが約束じゃからの。

「なんだよ？廊下は寒いからここでいいだろ？」

「俺も帝に1票。寒いのは嫌いだからな」

やはり、1発では上手くいかぬの。しかし読み通りいつとるの  
で次の手じゃ。

「最近裕一の扱いに苦心してての。2人から裕一の過去のこつ恥ずかしい話を聞いておこうと思うんじゃが、頼めるかの？」 2人に顔を近づけてもらい、ヒソヒソ声で伝える。もちろんニヤリとするのも大事なポイントじゃな。

「「そういう事なら協力するぜ」」

同時に全く同じ事を言いおった。流石のコンビじゃと思う。

その後、2人からじつくり話を聞いての。今度思いっきりからかってやるうと思つとる。因みに優にもらったプレゼントは何故か靴下じゃった。しかし友人にプレゼントをもらうのは初めてで内心ではとてもはしゃいでしまったわ。こんなのも悪くない、そう呟いたウチのクリスマス。

パーティーも飲めや歌えやという雰囲気を終え、時間的にそろそろ秋ちゃんは帰らなければならなくなつた。予想はしていたけど、僕はほとんどの時間を台所で過ごしていた。将と優は予想していたけどみんな意外とたくさん食べる人なんだなあと今更ながらに思う。読みが浅かつたから余計に疲れた気もする。

「じゃあ、残念なんですけどそろそろ帰りますー」

秋ちゃんは本当に残念そうだけど、それでも楽しんでいたのは顔を見れば分かる。しばらく僕にくつついていた時からあの表情のままだけ。

「じゃ、俺も帰るか。秋は俺が送ってく」

「えー」

「将、あたしも頼むよ。食いすぎたかなんかで気持ち悪い」

「バカだなー」

そんなやりとりの後に、3人は帰って行つた。組み合わせを見れば家族みたくに見えなくもない。絶対に言わないけど。

「じゃあ、ウチも帰るとするかの」

「じゃあ行くか」

そう言っつて僕はコートを着て準備をする。

「いや、今日は綾姉が迎えに来るからいいんじゃない」

そう言えば最近綾乃さんに会ってない気がする。

「父上とセキュリティ強化についてここしばらく会議しとつての。これ以上窮屈なのは嫌なんじゃが…」

最後の方はぼやきじゃないかなあ。

ピンポン

インターホンが鳴る。画面に移るは綾乃さん。後ろの車がやらに威圧感があるのは気にしてはいけないのだろう。

「じゃあ行くか。裕一、またな」

そう言っつて歩水は帰って行った。ここからが僕のもう1仕事だ。

「優。ちよつと来てくれ」

コタツで微睡んでいる優を起す。

「むう」

眠そつに顔を上げ、いかにも億劫そつに目を開ける優。今のも寝言じゃなからうか。

「な〜に〜?」

トロンとした寝ぼけ眼。というか、若干熱っぽい。顔も赤みが差していてまるで…

「優さ、酒飲んだろ」

犯人は大方帝のアホだろう。将は見た目と逆で酒に弱いから冗

談でも他人に勧める程飲んだら間違いなく潰れる。歩水はこの手のイタズラは結構好きだけど酒は匂いが嫌いとか言ってたから、たぶん他人に勧めたりしない。最後の最後に想定外の事態が起きているがこれはこれで良いのかもしれない。

そんなどうでも良い事を考えていたら優はまた眠ってしまった。もう何度も見た僕の家族の、優の寝顔。安心したその顔を見ていると起こすのは躊躇われた。

「メリークリスマス、優」

そう囁いて僕は優の前にこの間帝に協力を仰いで買ったブローチをそつと優の前に置いた。ブローチはあまり見かけないし、買ったからも悩んだけどモチーフが犬でしかも赤い色。見ていて優を思った。そう思ったら急にこれこそがプレゼントにふさわしい気がして思わず買ってしまった。だから本当は優によく見てもらいたかったけどそれはまた明日でもできる。僕はそう思う事にして初めて家族に送ったクリスマスプレゼントと優を眺めた。少し呑もう。幸せな気持ちを胸にそこからずいぶん長い時間僕は一人のんびりしていた。そんな僕のクリスマス。

そんな僕らのクリスマス（後書き）

前話で裕一君が買ったのはブローチでした！

将「裕一って相変わらずずれてるよな」

うーん、確かに

将「それより！俺の視点が無かったじゃねえか！」

……ホントダ。ゴメンネ

将「思い切り棒読みじゃねえ！？」

ま、これから期待だよ！…うん！

将「間があつたのが気になるかな」

多分チャンスがあるって！

将「まあ今回はいいか。さて、次回もその次もこんな感じだろうけどお暇書き！！よろしくな」

はい、ご意見ご感想はいつでもお待ちしています！では、また次回  
！

**お節料理を作ろう！（前書き）**

あんまりお節料理が関係ないです、すいません。  
ですがとりあえず、どうぞ！

## お節料理を作ろう！

「裕一、何やってるの？」

「今？お節料理の準備」

今年もラストスパート。この時期にとうかこの時間になると毎年お節の用意をする。しよつちゅう失踪する師匠も元旦だけは必ず家に来る。ここ数年はお節を食べた後にも失踪するけど。

「わたしも手伝う！」

なんだか妙にやる気の優。うん、でも…

「優は台所に立ち入り禁止でしょ？食材で遊ぶ奴は絶対に来てはいけないの」

「お願い！挽回のチャンスを！」

普段は全くそんな事を気にはしないのに、今日はなんか目が真剣だ。

どうしようか？

「じゃあ、僕が見てるって事でいい？」

「もちろん！」

優はとても輝いた良い表情をしている。そしておもむろに包丁を取り出して……

「これは切ってもいいの？」

数の子を持ちながら特上の笑顔で尋ねる優を見て頭痛がしたの  
は気のせいじゃないはずだ。

## 第1ステージ 煮豆

「そうそう、砂糖と一緒に豆を煮て味を少しづつ整えるの」

「りょーかいです、先生！」

ひよっとすると優の料理の腕は僕の想像以上なのかもしれない。なんとというか手際が良い。覚えも早くて、その点は僕以上だと思える。ちよっと悔しいけど。

「うん、できた！」

まあ嬉しそうな優を見てるとなかなか和む。

## 第2ステージ 栗金団

「ふっふーん、わたしだってやればできるのだ！」

煮豆ですっかり勢いづいている優。まあ予想以上だったから次もやってみせようかな。

「んじゃ、次は栗金団ね。まずはさつまいもの皮…って何やってるの!？」

説明しながら材料の準備をしていたせいでちよっと優から目を離したのが失敗だったっぽい。探していたさつまいものを両手いっぱい抱えて家にある特大の鍋に放り込む優の姿を今まさに目の端に捉えた。いや、そんなに大量のお湯に一度にその量のさつまいものが入れたら…ヤバい！  
バツシャーン！！

「ハアハア」

ほとんど反射だった。助かったのは偶然に近いし、それは僕か優の運が良かっただけの話だ。普通なら優の顔は大火傷、しかも一生ものは間違いない。師匠に何度めか分からない感謝をしつつ、だんだんと頭がポーツとしてくるのに身を任せる。本当に優を守りきれたのだろうか？

ハアハア

怖かった。わたしが持っていたさつまいもを鍋に入れようとしてたら裕一がいきなり飛びかかってきてたから。裕一に押し倒されて、その後鍋が落ちて中に入ってたお湯がこぼれる音がさっきしてた。今裕一はわたしに覆い被さったままぐったりしてるの。本当はきつと裕一を起こさなくちゃいけないんだけど怖かったせいで動けなくなっちゃったみたいで……。わたしは裕一の背中に手を回してギュッと抱きしめた。ぐったりしてるけど裕一に抱きついてると少しづつ落ち着いてくる。…たぶん裕一のおかげ。誰もいないのから恥ずかしくないし、もうちょっとこのままдейよう腕の力を少しだけ強くした。

どれくらい経っただろうか？てか、僕は何をやって……

「優!!」

そうだった！確か優が鍋ひっくり返してそれで、それで！

「あ、おはよ」

おはよ!?!?ってあれ？僕は何をやって……。何か変な感じだ。

ハグッ！

!?!?優にいきなり抱きつかれた！でも強く抱きつき過ぎて

ゴンッ！

「っゝゝ!?!?」

ソファから落ちて頭を打ち、そのまま悶える。

「ありやりや」

ニコニコ顔の優。涙目になりながらも恨みを込めて睨みつける。  
でも、なんであんなに機嫌が良いんだろう？

この疑問が解決する事はなかったが、僕が色々と思い出して優に雷を落とすのはここから1時間後の話になる。優は終わった頃はちよっと涙目だった。…やり過ぎたらしい。

お節料理を作ろう！（後書き）

doubter「どうしたの？そんなに落ち込んで」

裕一「…時間が無くて栗金団が不完全になった」

doubter「あー、裕一君変なところで凝り性だからね。てか、あれから全部作ったの!？」

裕一「だから、栗金団が…」

doubter「それはもういいから」

今年最後なのに裕一君が使い物にならないので、優に代打を頼むよ。

優「ふっふーん！では今年最後のご挨拶！来年もお暇書き！！をよろしくね。じゃあ良いお年を」

そういう事で、では！

優「裕一、帰って紅白でも見ようって！」

初詣までの道！（前書き）

あけましておめでとございます！

短いですが、すいません。もっと長くなる予定でしたが体調不良で死にました。とりあえず、新年一発めどうぞ！

## 初詣までの道！

「おーい裕一、早く行くぞ。とつとと帰ってお節食いたいんだからあけましておめでとう、もなく僕を（4時に）たたき起こし優が起きないから早朝からの初詣を断念。そして7時に起きてきた優を驚かせ満足した後また僕を急かすとなんとも慌ただしい。と言うか、ちよつと五月蠅い。」

「ちよつと待つてつて。優と帝がまだだから」

そしてさつき帝が来て一緒に初詣に行こうと言つてからは真剣に追い出そうかと思つた。師匠と2人で騒ぎまくつてたのはもはやひどい以外に形容する気にもならない。

「おう。私らもいいぜ」

「ぬぬ、動きにくい」

…正直驚いた。2人共振り袖を着て準備をしてきてた。帝は赤を基調に細身の着物で普段は飾り気が無いから映えて見える。

優も同じ赤だけどこちらは動きやすいように簡素な作りで、そのせいで普段より子供っぽく見える。それはそれで似合つてるけど。

「お、良いね2人共！」

そう言うのが早いか師匠は2人を両脇に抱きしめた。2人共腕力だけで絞まつてるのは見なくても分かる。心の中だけで合掌。

「鼎さん、痛え」

「ギブ！ギブ！」

「師匠、そろそろ行こうか」

良い加減助けてあげないと後が怖いからな。

「おいおい裕一、もっと他に言う事があるだろ？着飾った女が3人もいるんだぜ？」

さて、予想はしてたけどこつこつというのが1番苦手なんだよな。

「うっん、みんな似合ってるよ？」

もう使われ過ぎてるけど語彙が無いからしょうがない。

「裕一、それだけはちよつとひどくない？」

「私もそう思っぜ？」

「裕一、後でちよつと話をしようじゃねえか」

皆さん怒ってらっしやるようすで。でも、優は今までこつこつこの気にしなかったと思うんだけどな。

「と、とりあえず初詣に行こう！」

そんな違和感よりも自分の身を守るために話題を変えることに専念しよう。

年明け初日も大変そうだ。

飲せしー！(前書き)

飲もう！

さてさて時間は午後10時。優はもう寝てて、僕はこれから出かねなければいけない。師匠がいきなり飲みに行くからついて来いて。うう、寒い。

「裕一！こつちこつち！」

そんなに大声を出さなくても聞こえるのに。しかも手をこれでもかというほど振るのはやめてほしい。こつちが恥ずかしいから。

「はいはい。はあ寒かった」

「すいませーん、ビールもう2杯！」

僕が来るなり威勢良く注文する師匠。その横には既に片手では数え切れない空のジョッキが置いてある。師匠はザルだからこの位の量は問題ないけど。運ばれてきたジョッキの片方を僕の前に置いて準備は整ったと言わんばかりの顔をする。

「今日はちよつと話さなきゃならん事がある以外は何も無え<sup>ね</sup>から、ゆつくりしてけ」

そうか、それでこんな遠くの居酒屋なんだ。ここは日付変更まで飲む事を前提としたような店だから全く問題無いという変わった店だ。

「りょーかい。今日明日は僕も優も特に用事がないしね」

「よっしゃ！じゃ、とりあえず乾杯！」

カン！

師匠は嬉しそうに顔をこちらに向けジョッキを高く掲げた。まるで合コンのテンションだ。

「うーん、まずさ、ずっと聞いたかったことなんだけど裕一これは？」

師匠はそう言いながら小指を立てた。……似合わない。

「恋愛に関しては全くだよ」  
答えにもやや自嘲が入る。

「あれだけ周りに女の子がいるのにか？」

「？誰のことさ？」

「帝ちゃんだろ、優ちゃんだろ、あと……歩水ちゃんもかな」

ああもう、指折り数えるな！大体帝はともかく歩水は高校生だし、優にいたっては中学生だ。そういう目で見ることで自体どうかと思うぞ！…

「裕一、もう少し素直になれよ。いくら相手が中学生でも長い間一緒に住んでるんだから一瞬でもそういう場面があってもおかしくないだろ？」

「う、…まあ多少は」

ゴニョゴニョと答える。師匠は目を丸くしつつ大爆笑してるし。多分素直に答えると思わなかったか、思っている事自体意外だったのだろう。まさか…謀られた！？

「ま、この話はまた後にして、と。裕一に酔いが回らないうちに言うこと言っとくか。お前やたらと酒に弱いから」

「しほつが強すぎるだけでしょ」

「しほつ？かみやがったな！ハハハハハハ！」

うぐっ、ものすごく恥ずかしい。

「そ、それより言うことって何!？」

もはや無理矢理だけど話を変える事にした。もう笑うなって!!

「アハハハハ!はあ久々にこんな笑ったぜ。んで、話つてのはな」

師匠は急に真面目な顔になる。なんかえらい久しぶりにこの表情を見た。

「お前の妹の事だ。早けりや今月中に会える。と言うか帰って来れる」

その言葉を聞いて僕はどんな顔をしてるだろうか? 無表情な気もするし、喜びに顔をにやけさせていたかもしれない。驚いているのもあり得る。

「鼎さん、どうも。ってあれ?なんかまずかった?」

気まずそうに入ってくる帝。え、帝!?

「さて、じゃあ3人で飲みなおしますか。さっきの話を肴に」

師匠がニヤリとこちらを向く。目は獲物ほくを捕らえていた。なるほどさっきのまた後ではそういう意味か。僕は逃げられない地獄を予感した。妹に会えるかもしれないと言うことも分かったし腹を括ろうか。

その後、家に帰ってきた僕はたまたま起きてしまった優によると魂が抜けたようだったらしい。

飲もう！（後書き）

裕一君の妹は果たしてどんな人なのか？ 次回かその次くらいで明らかにかに！

そんな訳で次回もお暇書き！！よろしくお願いします。

再会！（前書き）

読んで字の如くです！ では、さじょうど！

再会！

ガッターン！

「裕一、いるんやろ？出て来いや！」

はい！？何このドスのきいてる声は？ごく普通の1日の終わりにはほど遠い、もっと言えば無用でしょ…

「ご用件は？」

警戒しながら尋ねた声は思ったより低い声になった。……目の前にいたのは師匠だった。

「よ。驚いたろ？なあ？武装までして」

そう言つて師匠はニヤリとした。獲物<sup>ナイフ</sup>は完全に死角に隠してたのにあつさり見破る辺りは人間離れしてるなあと感心する。……ちよつと恥ずかしいけど。

「んで、今度こそご用件は？」

「飯、まだ食つてないよな？2人前追加してくれ」

「はいよ。でも、優がいるからこれからはあんまり呼ばないでね」

師匠が2人前追加つて言う時は今まででもたまにあつた。そして見知らぬ客を連れて来て一緒に呑む。前回は強面の明らかにヤバい感じのお兄さんだった。あの時は生きてる心地がしなかつたなあ。

「今回は大丈夫だつて」

師匠は何故か自信満々に言い切つた。

料理も追加分まで出来上がり、師匠がふらりと戻ってきた。以前、どうやってタイミングをみてるか聞いたら料理の匂いで分かれると胸を張って言われた記憶がある。どんな化け物だよ。

「ただいま。裕一、飯にすんぞ」

「こんばんは」

一つは師匠の声。つまりもう一つの女性の声は今日の訪問客のものだろう。

「はい…よ…!?!」

そこにいたのは長い間記憶の中の住人となっていた僕の妹

紗奈。

「あつはつは！驚いたかこいつがお前の妹、紗奈ちゃんだ！」

師匠が言う事も耳に入らない。ただただ僕らはお互いを見ている。

「兄…さん？」

覚えていてくれたんだよね？ただ呼ばれただけで全身に喜びが走る。他人の空似さえありえないくらい記憶のままで、本当にあの時のままで……まんま過ぎじゃないか！？突然いなくなったのが紗奈が小2の時だけど、今の見た目じゃせいぜい小5、6くらいだろ!?!

「紗奈なんだよな!?!」

「兄さん!?!」

この流れは2人で抱きしめ合うところだ。実際、今まさにそれ

を実行し…

「裕一、誰が来たの？」

ガッターン！

紗奈がこけた。それはそれはびっくりするくらいの勢いで。

「だ、誰ですよ！？」

なんか覗き魔の対応みたいだなあ、と関係ない事を考えてみる。さて、何て説明しようか。

「それは飯食いながら話そうぜ。紗奈も嫌だろ？せつかくの裕一の  
手数料が冷めるのは？」

「む、そうですね」

ではお邪魔します、と言って家上がった。とりあえずは時間を稼げた事を師匠に感謝すべきだろう。

「で、結局誰なのさ？」

優は無視されて不満そうに独り言を言った。

「で、結局誰ですよ！？」

感動の再開もほどほどに、と言つか食事もほどほどに紗奈は捲し立てる。言い回しを考える時間は結局無かったらしいね。

「うん、一応僕の娘なんだろうね」

「!？」

聞いた瞬間から紗奈の表情がめまぐるしく変わった。驚きと絶望したような顔と若干の軽蔑。凄い久しぶりにあった妹に軽蔑されるのはかなり落ち込んだ。

「ふうー、ごちそうさまっと。じゃあこっつうのは家族で話した方が良いだろ。と言っ訳でじゃー!」

それだけ言って師匠は風邪のように消えた。

「説明すると…」

もう観念して全てを正直に話した。元々、家族に隠し事をする気は無いけど。

「…じゃあ2人共自己紹介して」

説明に茶々を入れる優ぜんこうに制裁を入れるのとそこで生じる誤解を解くのですっかりぐったりしていた。はあ、疲れた。

「じゃ、わたしからね!優です!裕一は2人つきりになるとわたしにあんな事やこんな事を「ちよい待った!!違っだろ!？」」

僕は思わず遮った。もう紗奈の目が怖くて振り向けない。

「兄さん、覚悟してくださいね？」

さっきの見た目のままの声じゃない声が聞こえる。今日何度目かになる覚悟をして……はて？

「え、紗奈…だよな？」

目の前にはさっきまでいた紗奈ではなく、僅かに面影が残るば

かりの紗奈（大）がいた。おそらく年相応なのはこちらなんだけど……驚き過ぎて若干他人事みたいに感じる。と言つか事態が理解できない。

「当たり前じゃないですか！つとでも、兄さんには説明してませんでしたね。実は……」

余談だけど、我が妹は説明が昔から苦手だ。故に僕自身に前情報が無いとほとんど意味が分からない。今回も例に漏れずさっぱり意味が分からない。分かったのは小さくなったり大きくなったりする事だけだった。

「紗奈ちゃん、それ何語？」

優が耐えきれなくなつたようで話を遮って尋ねた。でも、一応日本語だつたらうに。

「失礼です！こんなにわかりやすく説明してるというのに。大体です……」

ここから更に話は20分ほど続いた。こうして我が家の夜は更けていく。

## 再会！（後書き）

この話、まだ続きますよー！ ちなみに優の発言については裕一君の師匠こと鼎さんの入れ知恵がありました。無視されたことの小さな復讐（本人談）です。

では、次回もお暇書き！！よろしくお願いします。

## 再会！2（前書き）

短いです。すいません。

ですが前回の続きという事ですから……と、とにかぐじりぞー！

## 再会！2

「さて、んじゃ洗い物しますか」

よいしょっと。紗奈の話もやっと終わって一段落。

「あ、私もやります」

紗奈が教師に発言するかの如く手を上げて発言。

「うーん、じゃあお願いしようかな」

正直に言えばあまり期待していなかったけど紗奈は意外に慣れた手つきだ。しかも何故か上機嫌で僕が見ているのに気づくと照れ笑い。我が妹ながらももの凄い可愛さだなーと身内自慢。

「あ、わたしも手伝う！」

テレビを見ていたはずの優が紗奈と僕の間から声を張る。

「うーん、今はいいかな。3人でやるには狭いから」

むー、と頬を膨らませながら優はじゃあお風呂入ってくると風呂場に向かった。

「あ、あーちよつと買い物に行ってくる」

明日歩水に半ば嵌められてせいで作る事になっていたお菓子用の砂糖を買ってなかった。寒いのかなあ。

「じゃあ、私も行きます」

と紗奈。今日はやたらに上機嫌だ。やっぱり家族に会えるのはお互い嬉しかったんだ。

「わたしも行く！」

優も負けずにと手を上げる。でもまあ

「優が行ったら湯冷めするでしょうが。近所だしすぐに戻ってくるから留守番よろしくな」

外に出てから気づいたけど紗奈を置いてくるのは忘れてた。

帰ってきたら優が機嫌悪そうにぶくっとしていた。置いていかれたのがよっぽど不満だったらしい。

で、僕は寒かったから帰ってすぐに風呂に入っている。入ってから気づいたけど、紗奈を先に入れたら良かった。もう遅いけど。ま、寒いのが嫌いだからいつか。

「兄さん、一緒に入らせてください」

その声と共に紗奈が入ってきた。その格好は、その、まあ、何と云うか、タオル1枚だけで、うん。………実の妹ながら艶かしくて、うん。

「いやオイ!!」

それ以前に一緒に入る事自体が問題でしょ!? 兄妹とはいえ小学生じゃないんだから!!

「え？何か問題が？」

さも当たり前だと思ってる様子で。

僕の休息はちつとも休まらない時間になるに違いない。

ハア

今日の午後は色々あって疲れた。妹との再会は嬉しいはずなんだけど何て言うかこう…肩に余分な力が入る？なんかちよつと違うけどとにかく嬉しいには嬉しいけど疲れたのも事実。心の準備って本当にあるんだなあ、と今ならよく分かる。とは言うものの今日ももう終わる。明日から少しずつ慣れれば…

「兄さん、一緒に寝ましょ」

僕に平穩は無いらしい。本当に今の見た目は18に見えるけど中身はあの頃のままだ。ん？じゃあもしかして、あの頃みたいに扱ったらいいのか？

「いいよ、おいで」

ベットの端によって布団を開ける。昔はよくやった。懐かしい記憶だ。

「あ！ずるい、わたしも一緒に寝る！」

結局この日、たまたま入ってきた優も入って3人で1人分のベットに寝た。ちなみに優は寝相が悪いし紗奈はやたらと物に抱きつく癖があつて、そのターゲットにされる事故があつてよく寝れなかった事はここに記す。

## 再会！2（後書き）

私生活の関係（主に勉強）で更新がギリギリです。ですが！来週と再来週はなんとか頑張るつもりです！なんと書いてもあの行事ですから…

前日！（前書き）

間に合った！

前日！

「さて、始めるか」

今日は13日だからな。なんだかんだ言つて、ギヤアギヤア騒ぎながらも、裕一には毎年あげてるんだし。……一体誰に言い訳してるんだか。

今日は大変だったよ、ホント。教師が定刻通りに帰るなんてあんまり無い中、今日みたいな日に定刻通りに帰るつてのは格好の的らしい。隣の中年教師おやじからはニヤニヤした顔で「若いねえ」とか言われるわ、新人こうはいからは「相手はどんな人なんですか？」とか目輝かせて聞かれるわで大変だったしよあ。元から十分若いつての！！  
一番面倒だったのは秋だな。アイツの場合は答えが分かつててニヤニヤしながら聞いてくるからな。

「っと、ブーツとしてた！ やべえ、ちよいと焦げてる」

余分な事考えてる間に溶かしてたチョコの底が焦げちまった！

……仕方ねえ、やるか。

こりゃ勇気がいるな、渡すのも食うのも。

「さて、始めましょう」

兄さんにはバレないように追い出し……外に行ってもらいましたし。実は私、料理得意なのに兄さんが3食作ってしまったて披露するチャンスが無かつたんです。だからちゃんと認めてもらいます！ただチョコでは料理の腕を認めさせられませんからケーキにしましょうか。

……キッチンの勝手が分かりません。

「さて、やるかの」

3人寄ればなんとやらで頑張っ作ってみようと優と秋と協力して初挑戦。

「一応2人は料理、どのくらいできるんかの？」

「わたしは全然ダメなんだよ」

「一応、まともにできますよー。ところで歩水さんはー？」

優はある意味予想通りじゃが、秋はできるとは意外じゃな。

「ウチは優よりはましじゃろうが、できるとまでは言えんの」

背後で優がひどーい！と騒ぎおるのはこの際無視。

「ところで、みんな誰にあげるのー？」

秋が指示で、ウチは材料出し（場所と材料のスポンサーがウチだからの）、優は補佐でそれなりにてきぱきこなしておった最中に秋が聞いてきおった。

「あたしは裕一にー！」

相変わらずの元気な声で予想通りに答えたのは優。裕一はあれで結構優に優しいんじゃないか、いっそくっついてもいいんじゃないかと思うがな。

「ウチも裕一じゃな。他に渡す相手もおらんし」

考えてみたら、これはなかなか寂しい事かもしれん。今度また裕一のヤツに聞いてみるかの。

「裕一お兄さんモテますねー。わたしも裕一お兄さんには渡すんで4人ですねー」

4人はいなかったじゃろうが！うん？秋が口パクで何か言っておる。えー、み・か・ど・せ・ん・せ・い、じゃな。なるほど、クリスマスにあつたアイツじゃ。裕一のことが好きじゃと秋が言ったの。

「後はお父さんにも渡すつもりー」

しまった！父上の分を忘れておった！

「優、追加分残ってるかの？……って食べるな！」

板チョコをガツガツ食るとはかなり豪快な。しかも口紅の如く周りにべっとり付いておる。と、それより…

「どうするかの」

かくなる上は父上を騙して……

「これで足りませんかー？」

ふと、秋が目の前に鍋を差し出した。なんでも予備を作っていたとか。抜け目ないの。

「すまん、助かった。後で必ず礼をするからの」

「10倍返しでお願いしますー」

やっぱり抜け目が無いヤツじゃ！

当日！（前書き）

本日もギリギリでした

（^ | ^ ;）

当日！

「うーん、ただあげるのも面白くないかー」

そうふと思ったんですー。せっかく4人も裕一お兄さんに渡すんですから何かゲームをしたら面白くなりそうですしー。

「優ちゃん、歩水さん、どうせなら勝負しませんかー？」

2人とも興味津々で耳を傾けてくれましたー。後は先生を抱き込むだけっ！。

こ、怖い。5人の視線が集中している中、利き手チョコなんかするとは思わなかった。5人の内4人は目輝かせてるし帝は目が泳いでるし。どうもこの状況は秋ちゃんが準備したらしい。侮れない。

「どっじゃ？」

「いや、まだ食べてないから」

そんな自信ありげに聞かれても……。とりあえず、非常に食べづらいです。しかもどれが誰の作った物か分からないようになってるのに、それぞれに感想を言うことになってるから凄いです。プレッシャーがかかる。

「じゃあ、これからいただきます」

一番シンプルなものを一口。

「「「「「どう?」「」「」」

「普通に美味しいってのはダメ?」

期待はしてなかったけど全員に首を横に振られるとつらい。みんなチームワーク良すぎだろ!

「じゃあ次からはこれを50点として評価してください」

秋ちゃんが明らかに黒い意図をもって発言。全員納得ってどういうことだよ!!

「じゃあ早く次食え」

帝は何故かご機嫌が斜めらしい。まあ、とりあえずいただきますと。

「あ、ちょっと待て!」

急に焦りだす帝。つまりきつと……

「うん、って焦げ臭くない!？」

「うっ!」

帝が縮こまったから間違いないな。毎年くれるんだけど、どこかミスがあるんだよなあ。去年は箱があるのに中にものが無かったっけ。あれで1ヶ月はからかったな。

「ちょっと焦がすのはねえ」

今回も帝だし、少しからかってみるか。

「う、うわあああ!」

そう言いながら帝は走って出てってしまった。ちょっと泣きそ

うだったかも。

「今のは」

「ちよつと」

「ひどい」

「ですねー」

残り4人の女性陣から集中砲火。かなり良心が咎める。後でしっかり謝ろ。

「…気を取り直して、次行こう」

声がつわずつた気がするけど流れを作らないといい加減ジト目が痛い。

「では次じゃな」

次のはケーキのもの。見た目だけなら一番美味しそうだ。

「美味しい！たぶん僕より上手にできてる！」

お菓子類にはそれなりに自信があるんだけどこれは凄い。はつきり完敗だと思う。

「で、点数はー？」

「そつだな、…95点」

残り5点は後にこれ以上があった場合の予備だから事実上は100点と言っている。ガッツポーズを決めてるから紗奈のだったか。実は料理できたんだな。

「じゃあ、次じゃ」

次はかなりわかりやすいいわゆる手作りチョコって感じのトリユフチョコだ。

「……なんか甘くない」

「しょうがないじゃろ。砂糖入れ忘れたんじゃ」

あ、歩水だったか。にしても意外とボケてんだ。

「点数的には48点だな。砂糖が入ってればもっと美味しいだろうから」

自分で間違いが分かっている相手だと点数がつけやすい。みんな失敗だとそれはそれで怖いけど。

「じゃあ次はこれね！」

優が形が歪な形のものの皿を前に出す。明らかに自分のだろうね。

「はいよ。いただきますっ」と

甘くない。それだけならいいんだけど辛い。黒い粒はまさか胡椒！？

「ケホツケホツ！」

他にも何か唐辛子的なものがあつたらしい。その場で激しく悶えることとなった。

「今日は、ケホツありがとう」

思っていたより時間が経っていた。時間が時間なので、むせな

がらも何とかそれだけ見送りをした。紗奈には買い物に行ってもらったので今はいない。

「裕一、ごめんね」

優は心底ばつが悪そうに謝った。そう言えば最近少し大人しい気がする。

「大丈夫だって。ありがとうな。ごちそうさま」

そう言っ頭をなでてやると、突然抱きつかれた。別に嫌でもないからそのまま撫でている。

「えへへ」

幸せそうにはにかみ優は更に力を入れた。そんなに悪い気はしないな、そんな風に思った今年の2月14日。

裕一の思い出（前書き）

もはやお久しぶりです、すみません。  
とりあえずどうぞ！

## 裕一の思い出

ここ最近、寝る前にふと思う事がある。優が家に来てそろそろ1年が経つ。初めて会ったのは確かちょうど1年前だった。

直前に師匠に連れられて仕事の手伝いをした時に歩水と知り合っ  
て……ひどい目にあった。そのおかげで今の仕事があるんだから世  
の中は分らないものだとつくづく思う。日記をつけるようになって  
まだ1年経たないし忘れない為にも思い出せる範囲である時のこ  
とを書いておこう。

「裕一、大至急だ！5分やるから出かける準備だ！」

去年までは、月に少なくとも1回はこんな感じで師匠に強制連行  
させられていた。大抵は今と同じガードマン。1日だけなのは外出  
やパーティーに行く、つまり公に晒されなくてはならない要人が依  
頼人である為だ。どこに行ってもまともな人間であることを驚かれ  
た。いかに師匠が無茶苦茶かをよく示してるなあ、と今でも思う。  
話は逸れたが、この時の依頼人が歩水父こと大門さんだ。

「ふあゝあ」

「欠伸とは余裕じゃねえか」

この時までには二桁を越える仕事をやらされてきたが、1回も抜き  
身のナイフを使うことはなかった。銃を使わないのは、単純に持ち  
込めない場所が多いから。本音を言えば怖いから。師匠に教えられ

たのも銃火器類は一切ない。また話が逸れたが、要するに出番がなければ一日中棒立ちしてるだけの仕事。行く時に気合が入らないのも仕方のないことだ。

「今回も一日立ってるだけだろうから、眠いといえば眠いね」

「そりゃ、嫌味のつもりか？」

ま、どうでもいいさな、と師匠は不敵に笑って高層なのにすすけた感じのするビルの屋上の部屋に僕を引っ張り込んだ。

「いやあ、助かったよ。君が直々に引き受けてくれるとは。これで安心だ」

そう言って師匠に手を差し伸べた小柄のぽっちゃりが依頼人の大門さん。隣に座っている可愛いというより美人な雰囲気少女。この時は不釣合いだなあとか内心思っていたが、ふかふかの絨毯を土足で踏む居心地の悪さで依頼内容も依頼人もその少女も気になんかしてなかった。

「本当に君で務まるのかい？」

「うわあ！！」

足場の悪さに下を向いてしかめっ面になっていたところにいきなり覗き込むようにして言われた。はつきりと人を見下したような、小ばかにした声で。

「依頼内容はまだ聞いていませんが、ボディガードなら護衛対象にはかすり傷一つ付けずに遂行してご覧にいれましょう」

さっきの声に内心カチンときていたので、大きな事を言った。実際、何にも無いだろうと高を括っていた面もある。

「お、引き受けてくれたか。じゃ、アタシは帰るな」

言つなり師匠は消えてしまった。その直後に聞かされた依頼内容は今までで一番面倒な内容だった。

「まあ、一応あの人が推すんだからと見込んで頼んだぞ。娘の歩水の随行兼ガードマン」

ワシは仕事でもう行くからなつて必要書類を置いて去つていった。……直後に娘に手え出すなよとだけ付け足して。

そこから先はひどかった。今回の随行とは要するにパシリのことだったらしい。まあ、お金を貰っていたと考えれば執事といえた………いえないか。本人が寝てる時間を除けば傍で身辺警護していた時間よりも使われてせつせと働いていた時間の方が長かつたくらいに。睡眠はすぐ起きて対応できるように浅いので6日後には自分でも分かるくらいいよれよれになっていた。

「お前、ウチの事うざいとか思わんのか？」

最終日の七日目にふと、聞かれた。今までの異常なまでの人遣いはわざとやっていたらしい。

「理不尽なのは慣れてるからね」

苦笑と共に切り返す。さらに、僕の師匠は鼎さんだからと言つたらなるほどのと呟いていた。その目には明らかな同情が見て取れた。ガッ！

銃声が響いた。ほぼ同時にドアが蹴破られ能面のようなものをした不審者がなだれ込む。

「4人か」

独り言を呟いて気持ちにスイッチをいれる。銃相手に本気で戦うのは初めてだが、訓練はしている。いや、やらされた。まさか本当

に役立つとは思っていなかった。

「要求は一つだ。その娘を渡せ」

銃をこちらに向けながら無機質な声で用件を伝える。後の少女はさつきまでのふてぶてしさから一転して怯えながら僕の後ろにいる。

「そこ、動かないで」

後を見ずに簡潔に伝えた。直後に2本のナイフを抜き後から入った2人の腕に投げる。二人とも急襲に反応できず銃を落とす。素人でこそないが、いける。

残った2人が同時に僕を撃つ。1人目の手を狙ったのは予測済み既に構えていた2組目のナイフに当てて相殺。だが、2人目の銃口は狙いであった僕ではなく護衛対象の少女に向いていた。ほとんど反射で右腕を伸ばした。瞬間に人体の予想を越えた激痛が走る。右手の指先の感覚が生暖かい液体を感じた。左手のナイフで予想外と言わんばかりに棒立ちしていた3人目を潰す。

「さて、ゲームセットだ」

最初に要求を伝えた男が、後から銃口を突きつける。痛みで汗をかいてはいたが、その比でない量の汗が吹き出す。右手は撃たれた時に既に握れなくなっているし、左手を動かせば頭を撃ち抜かれるだろう。目の前がチカチカしてきて八方塞を全身で感じた。

男に銃を突きつけられたまま、立たされる。

「そつだな、両足イッところか」

この言葉、普通なら恐怖に引きつる所だが、何故かこの時はチャンスに思えた。チャンスは1度にして一瞬。

ガッ

右足の腿に言葉にできない痛みが走った。痛みで倒れそうになる

が、確かにチャンスは来た！今なら振り向いても一撃必殺となりうる部分に弾丸が当たらない！

振り向きざまに右手を銃にぶつける。痛みがぶり返し目の前が真っ白になった。その一瞬確かに意識を失っていた。二人とも倒れこんだ。次の瞬間には顔に鉄臭い血を浴びていた。左手に新たに持ったナイフが倒れこんだ時に男の喉元にささっていたらしい。

この辺から1週間くらい僕の記憶は確かでない。師匠から「襲撃を聞いて駆けつけたら、お前は全身を震わせながら気絶してたよ。歩水ちゃんが泣きながらお前を抱きしめてた。どうしよう！って叫んでたよ」

と聞いた。パニックのせいで何も覚えてないだろ、とばれた。

ここから先はどうでもいい話だし、恥ずかしいから割愛しよう。色々あって、歩水の下で働くようになったとだけ記しておく。

もう歩水も他の人もあんな目に遭わないことを願って



## 裕一の思い出（後書き）

若干以上に美化されていますよ、実は。だって裕一さんの記憶ですからw

作者的にはこの書き方は難しいことはよく分かりました。書き上げる苦勞が普段の倍くらいありましたし。

では、もう少しお暇書き！！お付き合ってください

## 倒れる裕一（前書き）

間が空きました。すいません、ホントに。ちょっとスランプというか書けなくて……。ここまで来るのに2回没案と化しました。実際スランプと言えるような実力を持ち合わせちゃいませんが、そんな事は気にせずどうぞ。

## 倒れる裕一

「おはよ〜」

眠たそうに目をこすりながら優が起床。時間は日の出の直後を想像すれば大きなズレはない。昨日は紗奈が1度学校へ戻らなければならなくなったため少しパーティーみたいなことをしたせいで我が家の夜は遅かった。僕は慣れているからともかく優には辛いだろう。そもそも何故優がこんなに早く起きなければならなかったのかと言つと、一緒に歩水の家に行く為だ。

普段なら優は来る必要は全く無いけれど、師匠が「俺が紗奈ちゃんを送つてやるからこっちは安心してくれ。ただ、その間は優ちゃんを含めて今までよりきつちり周りを見とけよ。久々に嫌な予感がする」と紗奈を見送る時に耳打ちされたのと、実際に師匠が近くになくなるからだ。

師匠は銃みたいな人で、近くにいと暴発に怯えることになるけど存在そのものが抑止力でもある。そのくらい名の通った人なのだ。

「おはよ。顔洗つて……つて何やってるの？」

体を擦つて背中にへばりついた優に尋ねた。優は紗奈が来てから改善されつつあったけど人、特に僕に必要以上にくつつきたがった。悪い気はしなかったから今まで治さなかったが。

「へへ〜。最近チャンスが無かったから！」

そう嬉しそうに言われると怒る気にもなれない。優は背中に張りついたまま動く気がないようなので仕方なく僕も洗面所まで行く羽目になった。

そんな風は無駄に時間を使ったせいで、歩水の家に着いたのは予定時間ギリギリになった。春休みだからと歩水は7時30分まで

は絶対に起きない。前に早く起こそうとした時にはベッドに引きずり込まれる被害にあった。……まあ確かに役得と言えなくもなかったけど。因みに優も歩水のベッドに潜り込んで2度寝中だ。2人の朝食を作っている僕にはちょっと羨ましい。もちろん、2度寝のことだ。

「ふあゝ。裕一か、おはよう」

歩水が起床。普段のまっすぐ絹のような髪が見る影もなくボサボサだから朝に弱いのは言われるまでもない。

「おお、そうじゃそうじゃ。実は今日から2、3日はこの家はウチと裕一と、時々優くらいしかおらんぞ」

しれつと言って朝食の席に着く歩水。理由を聞こうとしたら、ちょうど優が入って来て「おいしそう！」と騒ぎたててタイミングを失ってしまった。

そして今、僕にとっては一番眠い時間だ。することが無い。掃除は普段から業者がやっているのものであつという間に終わってしまったし、昼食までは時間がある。師匠の注意があるから離れるのはまづいし、優と歩水はそれぞれ昼寝と宿題の勉強中。それにしても優はまだ

「ふあゝあ」

思わず欠伸が出る。瞼も重いし、いっそ軽く寝てしまおうかと

思ってしまった。

「なんじゃ裕一、眠いん「静かに。と言うかそこから動くな」……かの？」

確かに警報音が聞こえた。体中を緊張させ、手元に獲物を構える。<sup>ナイフ</sup>

ガタン、扉を蹴破る音が響いた。歩水の体が強張っているのが分かるし、ベッドで寝ていた優は声も出ないほどのパニックに陥っている。

「まさかたった1日で師匠の予感が当たるとはね」

思わず口元をひきつらせる。相手は目の前には5人。右端の奴以外は男だろうがもう1人ははつきり分からない。全体ではもう1人が2人いる事までは想定した方が良さだろう。

「情報の通りだな。いくぞ」

中央のリーダー格らしき男の合図で銃を構えた。あのタイプの銃は連射ができないから、銃口さえ気にすれば僕でも対応できる。

4人はこちらに向けた。これは防ぐか当たらないかで歩水に当たることはなさそうだが……

「優！動くな！」

5人めが優に銃口を向けていた。しかもあれなら確実に当たる！叫ぶと同時に歩水を抱え込んで優に向かって飛び込んだ。

「間に…合え！」

銃声が響いた。ほぼ同時に体が悲鳴を上げる。左肩・右足・背中に走った激痛で目の前がフラッシュを浴びたように真っ白くなる。しかし肩の方に激痛が走るといっなのは優に当たらなかったことを意味する。それだけでも喜ぶべきだろう。抱えていた歩水をベッドの上に置く。優も歩水も完全に萎縮して呆然としている。

5人組は取り囲もうと動きを見せる。牽制を含めて全員に投擲2人に当たったがおそらくはさつき僕を撃ち損ねた奴らなのであまり好転していない。期待はしていなかったから焦ってはなない。

「これまでとはな」

リーダー格の男の一言で3人が一齐にこちらに構えた。左肩をやられてるから右手でしか投擲できない。3本当てて、早期決着を狙うしかない！

「クッ」

痛みのせいで1本の手元が狂った。2本は当たったがよりによってリーダーを残したか。

バン

発砲音が響く。銃口に注意はしてるが避ける訳にはいかない。体を捻って役に立たない左腕に当てさせた。瞬間に走る激痛。顔に自分の血が飛び鉄臭さが鼻をついた。

「ラッキーって事かな」

ニヤリとこちらを見る目は勝ち誇ったものだった。

「何が目的じゃ！」

歩水が怒鳴った。本人は精一杯らしく声がうわずった。あちらに注意が向くのはまずい。

ビュッ

「危ない、危ない。ナイフで銃と戦えるのも驚きだが、やはり……な」

目的は話すなって言われてるんだ、と付け加え男は再びこちらに向き直る。

「もういい加減キツいだろ？ だいぶ血まみれだし」

男の言う通りで、僕には後が無い。僕は投擲以外の戦い方をあまり知らないし、普段は邪魔になるから10本以上のナイフを持たない。既に9本使ったからラスト1本。さっきから脈を打つ度に目の前が白くなる。

「2人共、伏せてろ」

覚悟は決めた。過去にも1度やった事。あの時は偶然だったけれど、今回は言い逃れできない。アイツを刺殺する

足を奮わせて駆け出す。頭は左腕を当てて防ぐしかない。致命傷はもはや当たらない事を祈るしかない。そんな破れかぶれでの突貫。

「来るな！来るなあ！！」

こちらの意図に気付き男の顔に恐怖が浮かぶ。パニックを起こしてくれたのはラッキーとしか言い様がない。後から思えば足をやられたら終わりだった。放たれた銃弾は1発も当たらない。そして刺さった。

腹に刺さったナイフは一撃で、という訳ではないけれど立ち上がる気力は無いだろう。僕以上に苦しそうだし。

「歩水！」

あゝ、ヤバい。フラフラしてきた。

「な、なんじゃ？」

歩水が動揺しながらも答える。動揺し過ぎて男の様子が気になっっていない。たぶん、まともに視界に入っていないのだろう。

「僕の師匠に連絡取れるよな？」  
視界が暗転し始めた。

「ゆ、裕一？」

ふらつきが酷くなってきたから流石に気付いたようで歩水は心配そうな顔をした。

「大…至急で連絡…して…くふえ」

最後まで言う事なく僕の目の前は真っ暗になり。地面にぶつかる衝撃の直後に気を失った。

## 倒れる裕一（後書き）

この話は今までで、一番長く続くこととなります。裕一はどのようなのか？ それではお暇書きー！ もう少しおつき合ってください。

## 倒れる裕一2（前書き）

相変わらずのスランプ。学校が急に忙しく……  
きついです（泣

## 倒れる裕一2

「将、今日はもう帰っていいぞ。と言うか帰れ」

勤め先で上司にいきなり言われた時は冷や汗をかいた。

「それは一応公務員なのにまさかクビか!？」

公務員にクビがあるかよと苦笑され、なんかたつた今からお前に有給休暇とらせろって辞令が来たんだよ、と続けて俺の上司は首をか上げた。理由はさっぱりわからなかったがクビじゃないならとりあえずはいいか。

ケータイが鳴った。ここではケータイはご法度だが……ま、許されるっしょ。

「もしもし?」

「将か!? 悪いが今すぐ歩水……裕一の職場分かるか!？」

「やっぱりアンタか、鼎さん。知ってるけど」

心なしか焦ってる気がするけど、どうしたんだ?

「根回しに時間かかった。裕一が倒れた。今すぐ、そこに行って待機しててくれ。それと武装してけ」

……いきなり無茶なこと言われた。

「俺が行ってもどうにもならんだろ、全力でケンカしたらとても敵わねんだから」

「とりあえずは全滅させたらしいから、援軍の警戒だ!俺があと1時間ほどで合流する」

やっぱり焦ってる。この人が焦るくらい状況は一刻を争うっばい。

「はいよ。10分、いや5分以内で急行する」

他に役者がいないなら少し頑張るか。まあ実際の俺の役目は片付けがせいぜいだろっし。

「悪いな、無理言つて。死ぬなよ」

あいよ、それだけ言つて俺は走り出した。

裕一が倒れてからどのくらい経つじやろうか。優は最初こそパニックになつたが落ち着くと覚悟を決めて裕一の手当を始めおつた。道具も無く、自分の服やらそれがなくなると裕一にやられて転がつている奴らの服を使って拙いながらも止血代わりの包帯を終え、あるう事かウチらに銃を向けておつた輩までも手当てしおつた。ウチは血の臭いからの吐き気と恐怖ですくんでしまつておる。我ながら情けない。

はて、外が騒がしい気がするの？

「ゆ、優！大変じゃ！誰かおる！」

「え！」

優も一通り終えて、こちらに駆け寄ってきた。さて、どうしたら……。ああ、裕一がいたらの。

「アレ、将だよ！」

至近距離から耳が痛くなるほど大きな声で優が叫んだ。

「殺す気かああ！」

「どうなつてんだ、この屋敷は！？ 警報じゃなくいきなり物理的に殺しにきたぞ！？」

「将くん！裕一が」

今にも溢れそうなほどの涙を湛えた目でこちらを見ながら震えた声で叫んだ。裕一の奴、ちゃんと家族やつてたんだな。こんなにも心配されて。因みに俺がパニックにならないのは流血沙汰の裕一を見慣れてしまったから。修行中と銘打たれた頃の裕一は見る度にボロボロになってたから。

「ん、まあ話は聞いてるから任せとけて。えっと、歩水ちゃんだよね？包帯とガーゼある？」

本当はこんなものじゃどうにもならないんだけど、2人を安心させられたらそれだけでもいいや。そう思うことにして、歩水ちゃんから救急箱を受け取って形だけの治療を始めた。

案の定、何事も起こらず1時間が過ぎた。予定外なのは鼎さんがまだ来ないという点か。あの人、時間にルーズだからなあ。

「ふう、流石に疲れたわ」

突然ドアが開かれ、侵入者が

帝じゃん！身構えて緊張

して損した！

「うわ、酷い怪我だな」

「だよな。ってそうじゃなくてなんでいるんだよ!？」

帝はしれっとした顔で裕一と俺を交互に見る。

「鼎さんに決まってるんだろ？なんかいきなり担ぎ上げられてよ、この紗奈ちゃんと一緒にここまで来た」

俺を見る時は、何言ってるの？みたいな顔で、裕一を見る時は、半ば呆れ顔で。一応帝も俺と一緒に裕一の惨状を見てるから大騒ぎしない。紗奈ちゃん……だっけか　は今にも目が落ちるんじゃないかってほど大きく見開いて絶叫した、気持ちは分かるけどちょっと煩い。

ふと気づくと鼎さんが深刻そうな顔をしていた。

「血が圧倒的に足りねえ。まずいかもなあ……」

他の誰かが聞いていたかは知らない。が、俺は確実に聞いてしまった。

倒れる裕一2（後書き）

あまり多くを語りはしません。裕一はどうなるか？  
今しばらくお暇書き！！お付き合ってください。

## 取引（前書き）

もしまだ読んでくださっている方がいれば最高の感謝を  
まだ続けます、すいません

## 取引

「おやおや、やはり一足遅かったですか」

突然白いスーツ姿の男が飄々と扉を開けて入ってきた。姿だけなら年は20前後で裕一や将より少し年下に見える。が、落ち着いた雰囲気と胡散臭い感じがその場所にいる者に緊張と圧迫で思わず後ずさらせた。

「お前、何者だ？」

低く、威嚇した声の将。鼎さんとしても裕一の容態が思わしくないらしいことに不安を感じ、内心裕一を安全な病院にでも運びたくてしようがなかった。

「いえ、名乗るほどの価値もないしがない小悪党ですよ。今回は資金の獲得を指してここまで参上した次第です」

恭しく頭を下げ、細い目をさらに細めて微笑んだ。歩水はへビが首を絞めているような気分だった。誰も気付いていないが、裕一の顔色は少し前より白くなっていた。

「資金の獲得ってことは雇われてるわけじゃないんだな？」

鼎さんが獣であれば牙をむき出していそうなほどの警戒をしながら問う。

「ええ、そうなりますね。えーっと、すみませんお名前を聞かせて頂けますか？貴方は高名ですから顔は写真か何かで拝見したのですが本名は知らないのです」

不気味な笑みを崩さず、それが当たり前のように答える。

どこの誰だか知らない野郎に名乗る名前は無え、鼎さんは答えたが言葉の端々に苛立ちが感じられた。

「残念です。まあ、いいでしょう。それよりは時間も無いでしょうから私の用件を済ませてしましましょう。なに、ちょっとした取引

ですよ」

その直後、彼の周りに人がなだれ込んだ。気がつけばその中には裕一の首根っこを掴んでいる奴もいた。

「いやあ、彼は素晴らしい。これだけの怪我をしたとはいえ、5人も倒したのでから」

ですが、やはりこれだけ血まみれだとまずいでしょう？

白いスーツの男は仲間であろう男から裕一を受け取る。さつきまで白スーツに気をとられ、両手の指より多い男達に将達は囲まれていたのに気づかなかつた。

さて、状況を説明しましょう。白スーツはまるでクイズの司会者のように全てを知っていると云わんばかりに笑みを浮かべて言葉を続けた。

今この場には2人、連れて帰れば　まあ誘拐や拉致と同じですが、お金になる方がいます。それが歩水さんとそちらの赤い髪のおーっと優さんです。理由、その他もろもろについては知りません。おっと、話が反れてしまいました。で、我々としてはお二方とも連れて帰るのがもちろん理想です。しかし、その彼の師匠の女性がそれを阻止しようとするでしょうし奇策で出し抜いてもこちらの勝ち目は薄い。ただでは済まないでしょうね。そこで取り引きです。

「　　優さん、こちらへ来ませんか？」

予想外の展開に白スーツ以外は啞然として話についていけなかつた。

なに、簡単な事です。この満身創痍な彼と貴女の命を交換しようという事です。

## 取引（後書き）

その時優の決断は！？

お暇書き！！ もう少しお付き合ってください

## 答え（前書き）

うわぁ！ はい、気がついたら1月あいてしまいました。自己嫌悪  
真っ最中のdoubterです。  
後2話で決着がつく予定ですので、もう少しお付き合いください  
では、

## 答え

貴女の命やその他一切は保証しかねますが彼は今から病院で治療を受ければ完治しますよ。その手の事に関しては専門家ほどではないですが十分に詳しいと自負してますから。

「わ、わたしは……」

優は震えていた。その瞳には選択肢への恐怖とメリットに揺れていた。武器を構えながらも奇妙なほど存在感のない白スーツの配下の者を含め全員が優を見つめ、恐ろしいまでに張りつめた静けさだけが満ちていた。

いくらかの時が経った。そして優が遂に動きを見せた。その足を白スーツの方へ向け歩き出そうと　　したところで鼎さんにぶん投げられ1人の男を巻き込み体を打ちつけた。

「とりあえずアンタ覚悟しな。全くらしくねえけど今のオレはすこぶる機嫌が悪い」

鼎さんは倒れた男のポケットから普段絶対に手にしない煙草を取り出して火をかざした。あの特有の臭さがもはや誰のか分からない血生臭さと混ざって噎せかえりそうな酷い臭いとなって部屋を満たす。ふーっ、と紫煙を吐き出して直後にちよっ、と咳き込んで、それから白スーツの男を睨み付けた。

「優は渡さねえよ。その自分のせいで無様に倒れてるオレの弟子なんぞと自分自身の命を比べられるような良い女だ。お前らにやもつたいない」

声音は怒鳴るのをやっ、とこさ抑えてるのが誰にでも分かる震えた声。将や歩水達はおっかねえと場違いにもかかわらず考えていたほどだ。

「交渉決裂だと我々には逃げる以外ないのですが、逃げる前に彼を殺す事になりますよ？」

柔和な笑みは崩れないが、焦っているのはこの場の全員が感じていた。将達を取り囲んでいた男達にも動揺が走る。

「好きにしなよ。こんな阿呆。それも含め全部裕一が決めたこと。こいつの責任だ！」

最後に一喝して、全てを一蹴。白スーツはもはや裕一は荷物にしかならないと判断したらしく、彼を捨て次の行動へ身構えた。

答え（後書き）

この度、庵瑠璃様と業務（？）提携をしました！

ギャグ等の笑わせ方が僕個人としてはとても好きな方です！

「暉」僕が一番のお気に入りです。ぜひ、一読あれ！

<http://ncode.syosetu.com/n9929g/>

収束（前書き）

宿題に殺されてました（泣  
僕の高校生活ってなんだろう…

## 収束

意識がふと蘇って、身体を意識すると酷い有り様だった。何か流血沙汰ってレベルじゃなく血まみれだし。ドクンドクンと全身の血管がうるさい。ぬるぬるとした感覚が気持ち悪い。

目を開ける。血管の騒音の度に目の前が真っ白く塗り潰される。ああ、師匠や将達が見える。うん。おおそは思い出した。師匠がいるって事は僕は仕事を完遂する前に倒れたって辺りだから。

「うっ」

身体に力を入れて起き上がってみる。師匠はケンカやら戦闘（師匠には使い分けがあるらしい。僕には同じに思えるけど）で先に仕掛けるのは滅多に無いし、あれも稀にしびれを切らした時だ。

ゆっくりと立ち上がり、一呼吸。目の前はチカチカしてろくに見えないけど、目の前の人が誰かの判別はなんとかできる。それで十分だ。

「裕一！」

将がこちらに気付いて駆け寄ってくる。そして僕の肩を揺さぶった。

「痛いいたいイタイって！」

全力で叫んだ。意識が飛びかけた。目の前の視界が涙やらでぼやけた。すまん、と将が必死に謝ってるのがぼんやり見えた。

爆音が響いた。今、何をすべきかを思い出す。痛みを我慢しきる覚悟を決めた。

あの怪獣決戦の中に割り込んで師匠を止める。

「将、肩貸して」

言つが早いか将にもたれ掛かり歩を進める。

「おい、あそこまで連れてつてくれ」

「マジかよ!? 正気か!?!」

いや、そんな目を見開いて言わなくても。

「どうせ師匠あねは止めなきゃここ崩れるからね」

民家とは思えないくらいには広いけど歩水の家だし。さつきから逃げに徹してるあの白いスーツの兄さん、きっちり致命的な一撃を避けてるあたりただ者じゃない。僕は3回目が限界だからなあ。

「これ以上はマジで勘弁。マジでやられる」

ふと気づくと、将は僕の肩を抱えて師匠の背後に回っていた。と言つても、まだ手は届くような距離じゃない。

そこからは走って追いかける。目の前はフラッシュを浴びたように真っ白だし、足は纏れる。それでも師匠を捕まえて後ろから抱きついた。

「師匠、もうやめぐはあ!」

~~~~~

「つてのが僕の憶えてる限りなんだけど」

「美化されててむかつく」

目が覚めたらベッドの上で両手にギブスを付けられ拘束されていた。因みに足も拘束されていた。しかも何故か鎖。流石にちょっとパニックになりかけたけど将がすぐ横で立ってるのに気付いて助

かった。

「ま、確かに俺が聞いた話と大体同じだからそんな感じだよそれよ
り」

「裕一！」

弾丸のように走ってきた誰かが体当たりをかまして抱きついた。
そのままギョツと腕に力をいれた。

「ちよつと痛いって」

「ふえええ裕一い」

優は泣きじゃくりさらに力を入れて抱きしめた。

身体中が怪我をしていない部分さえミシミシなって更に重傷になったのはちよつとした与太話。

収束（後書き）

これで、連続話は一応収束です。ここまで付き合ってくださいありがとうございました！！

！
まだお暇書き！！ 続きます。次回もどうかよろしくお願いします

病院の悪夢（前書き）

いやあ、つい出来心で。やってみたかったんですよ、いろいろ話

病院の悪夢

「今日で検査も終わりましたし、内蔵に損傷は無いので次の食事から食べられます」

一体どんな体してるんですか、と若い医者は苦笑していた。

入れ替わりで結果を聞くために外に出していた優が駆け入ってきた。いつの間にか、師匠も来ていたらしい。

「んで、裕一どうだったんだい？」

優が僕に抱きついていているのを尻目に師匠が聞いてきた。単に見慣れただけかもしれない。毎日来るとすぐにこれだから。

「臓器は無事だから、今日から食事ができるって」

言い終わらないうちに、師匠の目が細くなりニヤリと笑うとまだ時間はあるな、とかよく分からない事を言っただけで急に出ていった。

「大丈夫かの、裕一？」

そろそろ夕食という頃になって師匠と一緒に歩水がひよっこり表れた。2人そろってニヤリと悪どい笑みを浮かべている。病室が急に、死刑台になった気分だ。

そこへ看護師さん（敢えて女性であると言及しよう。意味はなけれど）が入ってきた。どうやら食事の時間らしい。思えば入院などしたことも無かったので、病院食というものを食べたことがない。やはり、よく聞くように不味いのだろうか？　そこまで考えてふと気付いた。今僕の両腕は骨折等のせいで食事など到底叶わない。

……………やべえ、どうしよう!？

「なんじゃ裕一？　別に気を使わなくて良いぞ？　遠慮せず食べると良い」

「そうそう。遠慮はいらないからな？」

しかもこの2人確信班か！！

「裕一、これじゃご飯食べられないでしょ？わたしが食べさせてあげる！」

はい？…ええ！？

いやちよつと待って！あくん、じゃないって！外野2人が明らかに狙ってましたってしたり顔だから！

「むゝ、早くう！」

「ちよつと待て、落ち着け！まあ、僕も落ち着いてないけど！」

情けないけれど、一番錯乱してるのは間違いない僕だった。歩水は隠すこともなく大爆笑してるし（笑い方が明らかに女の子のそれではない）、師匠に至っては笑い過ぎて悶えていた。………どうやら逃げ道は無いらしい。

「あ、あくん」

「はい、あくん！」

恥ずかしさで、軽く意識が飛びそう。

「兄さん！」

空気が凍った。よりによってこのタイミングでなくても。

「何やってるんですか！？」

「何って、裕一にあくんをやってるんだよ！」

最悪な言い回しだった。しかも何故か紗奈も私もやりますとか言ってるし。

師匠と歩水は笑い死にそうな勢いだし。とりあえず、足掻いてみようか。

「師匠と歩水はもういいでしょ？他に何かする訳でもなさそうだし」「なんじゃ裕一、ウチらにもやって欲しいんか？しょうがないの、ほい鼎さん」

してやったりと言わんばかりの顔でニヤリと笑みを濃くした歩水は師匠にもスプーンを渡した。おそらく持参。

……なんか紙一重で生き延びたはずなのに恥ずかしさで心が折れそうだ。いつそあの窓から飛び降りてしまおうか。

「騒がしいですよ」

新人っぽい医者が注意をしに来た。部屋から出ていく時のゴミを見るような彼女の目を僕はきつと忘れないだろう。

病院なんか大嫌いだ。

病院の悪夢（後書き）

おまけ

このあと、数日におよび3食毎回こんな感じなことになる騒がしいとお説教（裕一のみ）をされ、病院ではピンク色の個室という伝説が残りましたとさ

と続きます（笑

次回も、どうぞよろしくおねがいます！

もう出ます。(前書き)

最後は裕一渾身の悩みです(笑)

もつ出ます。

僕が両手をとりあえず動かせるようになって退院してするまでには結局一ヶ月かかった。その間に優の夏休みが終わってしまったっていうのは罪悪感があった。だから、ということでもないだろうけれど優が必要以上にくつついてくる。流石に料理中に後ろからぶら下がるのは止めてほしい。まあ許せる範囲だけ。さて、

「入れてよ〜！」

「ダメだ」

「なんで？いいでしょ？」

「ダメ」

「お願い！」

「ダメ。というか、おかしいって分かるでしょ！」

「なんでよ〜。あ〜け〜て〜よ〜」

押し問答もいい加減にしたいんだけど、こればかりは譲れない。優と僕の間にあるのはドア一枚だけ。そして、中にいる僕は、また外にいる優もおそらくは、裸だった。そう、ここは風呂場である。

優は何をとち狂ったか、一緒に入ろうと言い出した。もちろん、僕は常識をもって断っている。

「へくち！」

僕の堅固なはずの常識の壁は優のくしゃみによって打ち崩された。

「えへへ〜、たまには良いでしょ」

僕が優に背を向けているにも関わらず優は隠そうともしていない。……決して見てないぞ、うん。

「裕一、こっちこっち」

優が浴槽から手招きをしている。決して見ようとはしていない。見ていたとしても故意ではないんだ、うん。

「じゃあ、僕はそろそろ……」

とにかくさっさと風呂を出よう。

「ダメ！まだ一緒に入るの！」

裸のまま、優に、抱きつかれた。お互いの身体が直接触れて……この後、僕は風邪を引いた。

後から聞いたことによると勢いよく抱きつかれ、後ろに引っぱられた時にひっくり返って頭を打ち、意識が飛んだそうさ。

実に、もったいな……危ない行為だなあ。

最初はここまで暴走してなかったけど、なんかやっちゃったかなあ

もう出ます。(後書き)

短いすねw

でも、限界でした(オイ

そろそろ、都合上連載は終えるかもしれませんがもう少しの間お暇書き!! よろしくお願ひします

思われること

「裕一、どこかに行こ！」

その優が珍しくそう言うのでデパートに行くことにした。優は元気がなくせに意外と出不精で、自分からは滅多に出かけようとしない。

「あのお店の事件覚えてる？」

優が指差したのは安さを売りにした僕も優もお気に入りの服屋だった。

「覚えてるよ」

僕達はあまり頻繁には来ないのに、店員全員に顔を覚えられた事件があった。

「失礼ですが、あちらの女の子とはどのような関係で？」

店員には確かこんな感じで聞かれたんだっと思った。優が来てまだ日も浅かったから周りから見たらぎこちなかったのかもしれない。でも僕はあの時何も考えてなかったから

「……親子です」

今にして思えばあの答えるまでの間も悪かったんだろうし、僕は見た目には親子に見えないことも頭から抜けていた。そしてあの頃は誘拐事件が起きた直後だったので……

「ちよつと署の方まで」

と任意とはいえ、ほぼ現行犯同然に連れて行かれかけた。その時にタイミング良く将が来て

「万引きでもした？」

と不要なボケをかましながらも、かばんから書類のような紙を見せに助けてくれた。何の書類か聞いたら

「一応は親子関係を証明する書類なんだけど、ありや偽物。という

か、あんな書類無いんだよ。あの警官も馬鹿だよなあ、親子証明なんて存在しないっての」
ひらひらと振り回していた書類はよく見ると作りの甘い、将の作った適当なものだった。

「ここでパフェ食べよ！」

優が指したのはサイズの大きなことで有名なレストランだった。

「前に食べきれなかったでしょうが」

優と帝とは前にこの店で同じくパフェを食べようとして2人共道半ばで脱落し、結局僕はその残りと自分の分（気がつけば3人分の注文になっていたので食べたけれど少しばかり気恥ずかしかった）で分量にして丸2つ分食べさせられた。あの時は甘ったるいクリームにやられ気持ち悪くさえなった。

「だからこそ行くの！リベンジするんだから！」

どうやらお姫様はヤル気らしい。

「ジャンボパフェ2つ！」

優が店に入るなり店員が対応に来る前に大声で叫んだ。それでもそれを気にすること無く、僕らを2つあるテーブル席の奥の方に案内し、1分ほどで全長30センチ横幅は…どんぶりに並ぼうかという程あるうかという凶悪なパフェが運ばれてきた。……いや、一体どうすればこんなに手早く作れるのだろうか？

「ではは、いただきまーす」

甘味大好き優は飛び付くようにがつついた。あっという間に口の周りはクリームとアイスによって真っ白に輪を描いていた。

20分経った頃に僕はようやく食べ終わり、一息ついた。そのまま終わっていない優を見ると潤んだ瞳で容器を睨み付けていた。それまで僕よりも早かったに、半分を過ぎた辺りで急激にペースを落とし遂にスプーンは止まっていた。

最終的に僕は優が食べきれなかった分も食べることになった。今回もクリームで胸焼けみたいな症状に陥った。

それから、色々な店を2人で漁った。最後には疲れてしまつて優は僕の背中で寝息をたてながらの帰宅となつた。

思つたより軽くて、それでも1年半前に抱きつかれた時よりはほんの少しだけ重くなつた優の横顔に目をやった。ちよつと前まで自分とは無縁と思つていたこの背中にある温かさを手放したくないと、しみじみと思つていた。

思われること（後書き）

多少以上に強引だと自分でも思います。

なぜ、このようにムリ（な終わらせ方）をしたのかは後日活動報告にいれようと思っています。もし、ここまで読んでくださった方がいらっしやればそこまでお付き合いいただけると嬉しいですよ。

短く、稚拙な小説未満のこのお暇書き！！ をここまで読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3436e/>

お暇書き！！

2010年10月11日18時56分発行